

幼稚園教育指導資料第4集

一人一人に応じる指導

平成7年3月

文 部 省

ま え が き

これからの教育には、画一的な人間を育てることではなく、自分らしさを発揮して、心豊かに意欲をもって生きる力の育成が求められています。

幼稚園教育においても、これまで一部に見られたような教師主導の画一的な保育ではなく、一人一人の幼児が「その子らしさ」を発揮しつつ育っていく過程を重視し、望ましい方向に発達を促すという幼児期にふさわしい教育が実現されなければなりません。

本書は、教師が幼児と生活を共にする中で、一人一人の幼児の発達の特性や行動の仕方、考え方などを理解して、それぞれの特性に応じ発達の課題に即した指導を行っていくための基本的な考え方や方法などについて、実践事例を取り上げながら解説するものです。

各幼稚園においては、本書を手掛かりに日々の実践を工夫され、幼児の充実した生活を実現されることを望んでやみません。

本書の編集に終始熱心に御協力いただいた幼稚園教育指導資料作成協力者の各位に対し、ここに深く感謝の意を表する次第であります。

平成7年3月

文部省初等中等教育局幼稚園課長

塩 谷 幾 雄

目 次

第1章 幼稚園教育の課題と教師の専門性	1
1. 幼児期にふさわしい教育の実現	2
(1) 教育観の転換	2
(2) 一人一人の育つ力を支える	4
(3) 家庭と共に	5
2. 保育の営みと教師の専門性	6
(1) 一人一人に応じることの意味	6
(2) 保育の営みとカウンセリングマインド	8
(3) 新しい専門性を身につける	11
第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢	13
1. 心の動きにそう	14
(1) 温かい関心を寄せる	14
(2) 心の動きに応答する	17
(3) 共に考える	21
(4) 集団のつながりを育てる	25
(5) 保護者との信頼関係を築く	28
2. 教師自身に目を向ける	31
(1) 自分のかかわり方に気づく	31
(2) 心の健康を保つ	33

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）	35
事例1 内面の心の動きをとらえながら	36
事例2 あるがままの姿を受けとめて	39
事例3 記録を積み重ねる中で	42
事例4 みんなで考える	46
事例5 保護者の話に耳を傾ける	49
事例6 保護者と共に考える	53
 ※ 参考資料 具体的な状況に応じる〔演習問題〕	59

第1章

幼稚園教育の課題と 教師の専門性



第1章 幼稚園教育の課題と教師の専門性

1. 幼児期にふさわしい教育の実現

近年の都市化・少子化等、子供を取り巻く諸環境の著しい変化は、子供たちの発達に少なからず影響を与えています。このことは教育に新しい課題や期待を生み出し、学校教育全体が新しい教育観のもとに発想の転換を図ることが必要となっています。

平成元年の幼稚園教育要領や小・中・高等学校の学習指導要領は、それまでのややもすると知識や技能を一律に授けることに偏りがちであった教育から、自ら学ぶ意欲と社会の変化に主体的に対応できる力を育てることを重視する教育へ、というこれからの学校教育への期待に応えるものとして改訂されました。

このような中で、幼稚園教育は、生涯学習の基盤を培うという観点に立って、生きる力の基礎となる豊かな心情や意欲、態度を、幼稚園生活を通して一人一人の内面に育てることを目指しています。そのため、一人一人の幼児の内面を理解し、心の動きに応じる教師の指導が他の学校以上に重要な意味をもっています。

幼稚園教育の新しい課題は、教師の視点を一人一人の幼児の内面に向けていくことであり、教師は、幼児にとって最も大切な環境であることを自覚し、一人一人に応じる教育を展開することにより、幼児期にふさわしい教育の実現を図っていききたいものです。そのためには、以下のようなことが求められています。

(1) 教育観の転換

これまでの幼稚園教育は、どちらかといえば、同じ内容を同じ方法で行われがちであり、教師の選択した望ましい活動をどの幼児も同じように行う、画一的な保育が多く見られました。

画一的な教育の考え方のもとで指導を進めると、活動がどう展開されているかはみえても、一人一人の幼児がどのように感じ、どのような気持ちや思いを抱いているのか、その内面に何が起こり、どのように乗り越え、何が身についていくかなど一人一人が育っていく過程は見えにくいものです。

幼稚園においては、教師が幼児と生活を共にする中で一人一人の幼児の発達の特性やその幼児らしい行動の仕方や考え方などを理解して、それぞれの特性や発達の課題

1. 幼児期にふさわしい教育の実現

に応じた指導を行うようにすることが重視されなければなりません。

そのためには、幼児の側にたって一人一人のもつよさや可能性に目を向けることが必要です。すなわち、画一性を排し、一人一人に応じる指導へと教育観を転換することが求められているのです。

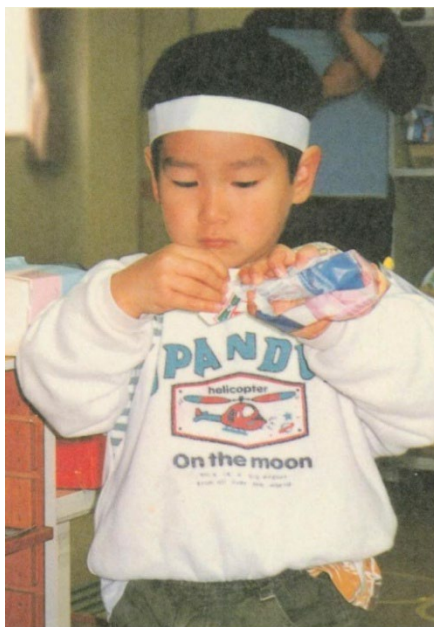


(2) 一人一人の育つ力を支える

幼児期にふさわしい教育を実現していくためには、新しい発達観にたつことが必要です。つまり、子供が周囲の環境に自発的・能動的にかかわりながら、自分の世界を広げていく過程を発達としてとらえ、一人一人のその子らしい見方やかかわり方を大切にする立場にたった教育の実現が求められているのです。

幼児期において、幼児一人一人がその子らしさを発揮していくためには、幼児一人一人を信頼し、ありのままを受けとめる教師の存在がきわめて重要になります。教師と共に生活する中で、幼児は自分を見守ってくれ、心の動きに応じてくれる存在を知ること、自分を発揮し自分の生活を創りだしていくことができます。つまり、教師の姿勢として、幼児一人一人のよさや可能性を見出し、その子らしさをそこなわずにありのままを受け入れることが大切なのです。

幼児を受けとめるということは、単に幼児の行動を表面的にとらえていくことではありません。幼児の行動を通して、幼児が何に心を動かしているか、その幼児にとっての意味を感じとり、今、一番大切にすべきことは何かなどについて、できるだけ幼児の立場にたってとらえることが必要です。そのことによって幼児に必要な体験がみえてきます。幼児の行動が、教師の持っている基準に照らしてあまり適切ではないと思われるものであっても、その幼児にとっては発達に必要な経験ということもあるのです。幼児に思いを寄せ、幼児の生活の仕方、生活の流れ、リズムを共にすることで、幼児の気持ちや思い、欲求など目に見えない幼児の心の声を聞き、その幼児の内面を理解していくことが必要です。



すなわち、幼児自身が伸びようとする力を信頼し、その育つ力を支える教師の姿勢が求められているのです。

(3) 家庭と共に

幼児期にふさわしい教育を進めようとするとき、家庭を抜きにして考えることはできません。幼児一人一人が幼稚園において自己を十分に発揮するためには、幼稚園が安心して過ごせる場になっていることが必要ですが、それは教師と保護者との信頼関係が作り出されることによって、さらに確かなものになることを忘れてはなりません。ここに、幼稚園の教師と保護者がお互いの立場や役割を理解し合い、協力しようとする関係がきわめて重要となる意味があります。

また、一人一人に応じた教育を進めるためには、家庭や地域を含めた生活全体を視野に入れて、一人一人の幼児の興味や関心の方向や必要な経験をとらえる必要があります。それぞれの家庭には、子育てについての多様な価値観があります。幼稚園では、それぞれの実情を受けとめながら一人一人に応じる指導を考える必要があります。そのためには、幼児を中心に据えて、よく話し合い、情報を交換し合うことが大切です。幼稚園と家庭は子育てという共同作業を行う関係にあることを共に自覚し、支え合っていきたいものです。

こうしたことによって、教師と保護者との間に信頼関係が築かれ、心のつながりが生まれてきます。この心のつながりが、幼児一人一人の望ましい発達のための基盤となるのです。すなわち、子供を中心に据えて誠意を持って共に考え合っていこうとする姿勢をもつことが求められているのです。



2. 保育の営みと教師の専門性

(1) 一人一人に応じることの意味

日常の保育の中で、教師は一人一人の幼児に応じた指導を行わなければならないことは言うまでもありません。そしてそれは、幼稚園教師の専門性として何よりも大切なことです。

しかし、一人一人に応じるといっても、幼稚園教育の目指している心情、意欲、態度を育てるために、一人一人の何に応じればよいのでしょうか。日常の保育を振り返って考えてみましょう。

例えばその一つに、一人一人の幼児の要求に応えようとする教師のかかわりがあげられます。それぞれの幼児は教師に対して「～やって」「～が欲しい」「～を見て」など様々なことを求めてきます。このような要求に教師が応えていくことは、保育を進めていくうえで大切な役割を果たします。幼児は自分の要求を満たしてくれる教師に親しみや自分に対する愛情を感じて信頼を寄せるようになるでしょう。しかし、このような要求や主張を表面的に受けとめて応えようとすれば、教師はそのことに振り回されて応じきれなくなり、「ちょっと待ってね」を連発して、結局幼児に不信感や不安感を抱かせてしまうこともあります。また、このような応じ方の度が過ぎれば幼児の依頼心やわがまを助長するなど自立を妨げる結果になることは明らかです。

幼児の要求や主張には、心の奥で望んでいること、訴えようとしていること等が含まれていることが多いものです。

次のような事例があります

3歳のM子は、入園以来、自分から動こうとせず、他の幼児の様子を見ていることが多い幼児でした。2週間ほど経った頃、突然、「おうちに帰りたいの」とS教師に訴えてきたのです。S教師はおうちに帰りたくなくなってしまったM子の不安を取り除こうといろいろなかかわり方をしてみました。しかし、M子は毎日、「おうちに帰りたいの」と訴えてきます。そのうちにS教師は、“おうちに帰りたいの”と言うM子の表情にあまり暗さがなくことに気づきました。M子は“おうちに帰りたいの”という表現でS

2. 保育の営みと教師の専門性

教師とのかかわりを求めているに違いありません。

一人一人に応じる指導とは、具体的な幼児の要求や行動から、その奥にある一人一人の幼児の内面に気づいて応えようとすることです。幼児の表現の仕方は周囲の大人や教師には理解しにくいものであるかもしれませんが、一般的な意識や教師のもっている価値基準からはずれていることもあるでしょう。しかしながら、どんな時にも幼児は自分の思いをその行動や言葉、表情などで表現しようとしていることを理解する必要があります。

一人一人に応じるということは、その子が今抱えている思いを出発点として大切に受けとめ応えることです。それはわがままを許したり、行動をなすがままに放任することではありません。一人一人の内面を理解しようと努めながらその幼児が自分の力でよりよい方向に向かって歩き出せるように援助していくことです。そのためには、何よりもまず、幼児一人一人がかけがえのない存在であること、その子らしい反応や表現の仕方があること、周囲の一人一人に温かく見守られ、受け入れられた時に自分の力で動けるようになることを理解し、一人一人を信頼することが大切なのです。



第1章 幼稚園教育の課題と教師の専門性

(2) 保育の営みとカウンセリングマインド

保育の営みの中で大切なことは、教師と一人一人の幼児との間に信頼関係を作り出すことです。また同時に、幼児の言動や表情から、その子が今何を感じているのか、何を実現したいと思っているのかを受けとめ、自分で課題を乗り越えていくための適切な援助をすることも重要です。

つまり、

- ・心のつながりを大切にする
- ・相手の立場にたって共に考える
- ・ありのままの姿を温かく受けとめ見守る
- ・心の動きに応答する

などの点で、保育とカウンセリングには共通している点が多いことに気づきます。

「カウンセリング」というと、日常の保育とは関係が薄いことのように受けとめられるかもしれませんが、しかし、保育の営みで考えるカウンセリングマインドとは、カウンセリング活動そのものではありません。カウンセリングの基本的な姿勢を教育の場に生かしていこうとするものです。

カウンセリングとは、心理療法の中で生み出されてきたもので、一般には相談に訪れた人がカウンセラーの援助を受けながら心の問題を解決していこうとする過程を指しています。カウンセリングにおいて、カウンセラーは来談者との心の交流を図りながらその自己回復や自己解決を支えていこうとすることを基本姿勢としています。言葉を通しての面談が主ですが、自分の感情を十分に言葉で表現できない幼児などには一緒に遊ぶことを通して同様な関係を作り出していきます。

このような過程の中でカウンセラーは、来談者が自分の問題に気づき、その問題を自分で乗り越えようとするができるように、その人の心に寄り添って共に考えようと努力をします。言い換えれば相手の心の世界をあるがままに受けとめ、相手の立場に立って考えていこうとする姿勢に徹しようとしているのです。カウンセリングの過程で来談者が自分で課題を乗り越えていくためには、まず、両者の間に温かい信頼関係を作り出すことが重視されています。そのために、相手のありのままの姿を温かく受けとめる肯定的関心や受容的態度をカウンセラーがもつ必要があり、同時に

2. 保育の営みと教師の専門性

相手の心の動きを受けとめる感受性も要求されます。

カウンセリングマインドをもった接し方とは、具体的にどのようなことを指すのか一つの事例から考えてみましょう。

保育室では、子供たちがそれぞれの思いをもって楽しそうに遊んでいました。そんな中で、M子がぽつんと離れたところで無心に絵を描いています。M子の絵には、お日さまが三つ描かれているのです。S教師はその絵を見て、「お日さまが三つもあるの？」と優しいけれどたしなめる調子で声をかけたのです。おそらく、S教師は、M子がふざけて描いていると思ったのでしょう。

S教師が立ち去った後、その場に近づいたB教師は、少し困った様子のM子に「たくさん、お日さま描けたね」と話しかけました。すると、M子は「お部屋が寒い…」と応えたのです。その日は、とても肌寒く、保育室にいても寒さが伝わってくる思いがしました。M子は、保育室がとても寒く感じたので、お日さまが三つくらいあったら、もっとポカポカ暖かくなるだろうなと思ったのかもしれません。「暖かそうだね」と言うB教師の言葉にM子の表情がやわらぎました。

この事例の流れとして、まず、「聴く」ということがあります。「きく」には、他に「聞く」「訊く」などがありますが、「聞く」は聞こえてくるという受動的な意味が強く、「訊く」は訊ねる・詰問するという意味になります。「お部屋が寒い…」というつぶやきをとらえるには、積極的に子供に向かって心を傾けて「聴く」という、子供の心に残る「聴き方」が必要でしょう。

二つ目に子供のあるがままを「受け入れる」ことがあげられます。教師は、お日さまといえば必ず一つと考えます。正しいことを伝えることの大切さは、子供たちと接していると常に直面する問題です。しかし、異なった価値を「受け入れる」ことも指導上の大切な中身と考えられないでしょうか。

三つ目として、子供との「つながりをつくる」ことの大切さが考えられます。S教師は、優しく「お日さまは三つかな？」と訊ねていますが、この言葉は、子供との「つながり」を無意識に切っています。いくら優しい言葉かけをしたとしても、そこに子供との「共感」が生まれないうち、子供との「つながり」はできないのです。共感とは、子供たちを理解しようとする時、客観的でも、道徳的でも、解釈的でも、否定

第1章 幼稚園教育の課題と教師の専門性

的でもなく、とにかく子供を「肯定的」に先ず見てみようということなのです。

最後に、子供の「心の流れにそう」ことです。子供たちは、思いもよらないことを発想したり、ときに大人を驚かせることがあります。「お日さまは、いくつあるのかな？」と訊ねることと「お日さま、たくさん描けたね」との間には、大きな距離があります。子供の「心の流れにそう」とは、子供の心の動きに最大の関心をはらいながら温かく見守っていくことなのかもしれません。

同様に、カウンセリングマインドをもった接し方は、幼児に対してだけでなく、保護者との信頼・協力関係を作り出し、幼児の教育について共に考え合うためにも必要なことです。

もとより、カウンセリングマインドをもった接し方をすれば、どの幼児も教師の思う通りの姿になったり、すくすくと伸びるということではありません。まして、全員が急に意欲的になったり、自立したりすることでもありません。一人一人の心の世界に近づこうと努力し、幼児のどのような姿に出会っても、そこから目をそらさずに一人一人の今ある姿を基点にして、発達を促す援助を考える教師の姿勢が期待されているのです。

これからの幼稚園教育にとって、一人一人の教師がカウンセリングマインドを理解し、その姿勢を身につけることの重要性がますます高まってくると考えられます。



(3) 新しい専門性を身につける

幼稚園教育要領においては、幼稚園教育の基本は「幼児期の特性を踏まえ環境を通して行うもの」であることを示し、幼児にとって最も大切な教育環境としての教師の役割をあげ、「教師は幼児との信頼関係を十分に築くよう努めること」としています。さらに、その基本に基づいて教育を進める際に重視する事項として以下の点をあげています。

- ①幼児が安定した情緒のもとで自己を十分に発揮できるようにすること。
- ②幼児の自発的な遊びを通しての指導を中心として総合的な指導を行うこと。
- ③一人一人の発達の特性に応じた指導を行うこと。

ここに述べられているものは、いずれも、幼児期にふさわしい教育を進めるために必要な、教師の幼児へのかかわり方を示すものであり、教師には、このための新しい専門性を身につけることが求められています。

前述したように、これからの幼稚園教育に必要な教師の専門性は、一人一人の幼児の内面を理解し、信頼関係を築きながら、発達に必要な経験を幼児自らが獲得していけるように援助することです。言い換えれば、幼児の心に寄り添って、その心の動きを敏感にしかも温かく受けとめて応じようとすることです。このような教師の新しい専門性は、単に知識としてその考え方を知ることだけで身につくものではありません。それは、教師自身が一人一人の幼児と日常どのようなかかわり方をしているのかを振り返り、自分自身に気づくことから始めなければならないでしょう。

教師のかかわり方は、幼児の言動や心の動きに写し出されるものです。しかも、それはどのような場合にどうかかわればよいかというような、一般的な答えがあるわけではなく、それぞれの教師の人間性と一人一人の幼児との関係が生み出しているものといえます。教師自身のかかわり方は、教師の感情や価値観など、内面の問題とも深くかわるので、自分の心の動きにも目を向ける必要があります。日々の保育の営みの中で、自分自身の体験を通して幼児の姿を鏡にしながら、一人一人の幼児に応じる自分らしいかかわり方を生み出すものとすることが必要です。

第2章

一人一人に応じるための 教師の基本姿勢



1. 心の動きにそう

幼稚園の指導において大切にしなければならないのは、一人一人の幼児の思いを受けとめ尊重しながら、その幼児が自分の力で歩き出せるように援助をすることです。それは、幼児の内面を理解しようとする教師の努力と愛情に裏付けられて生み出される保育の営みと言えるでしょう。その中で重要な意味をもつのは教師がどのような姿勢でどのように幼児とかかわるかということです。

教師と幼児の具体的ななかかわりを生み出す基となる幼児理解については、幼稚園教育指導資料第3集「幼児理解と評価」に詳しく述べられています。この節では、カウンセリングマインドを基盤として、一人一人の幼児の心の動きにそったなかかわりを生み出すために必要な教師の姿勢の中から基本となる点を取り上げています。

(1) 温かい関心を寄せる

幼児は、自分が誰かに見守られ受け入れられていると感じるときに、初めて自分らしいのびのびとした行動や心の動きを見せてくれます。反対に、その存在が無視されたり、否定されたり、あるいは過剰な要求や期待をかけられたりすると、不安感やとまどいから、心を閉ざしてしまったり、本意ではない行動をとるようになることもあります。

幼児の心の世界に近づいてその動きにそった援助を行うためには、何よりもまず、教師が幼児の行動を温かい関心をもって見守る姿勢が必要なのです。

温かい関心を寄せるといっても、やたらにほめたり、励ましたり、つきまったりすることではありません。幼児のありのままの姿を教師がもっている判断の基準によることなく、そのまま受けとめ、期待をもって見守ることなのです。このような肯定的な教師のまなざしから、幼児は、自分が教師に見守られ受け入れられていることを感じとるのです。

しかし、現実の保育の中では、教師の思いが先行して幼児の姿をありのままに受けとめられない場合も多いのではないのでしょうか。次の事例を通して考えてみましょう。

事例 友達と遊べばいいのに

園庭で鬼ごっこをしている数名の幼児の側で、Y子がしゃがみこんで地面に指で絵を描き始めた。その姿を見てF教師は『Y子ちゃん、あんなところで絵を描いている。鬼ごっこの仲間に入りたいのかしら、きっと入るきっかけがつかめないのよ。』と判断して、「ね、Y子ちゃん、そんなところで絵を描いていると友達とぶつかるよ。先生と一緒に鬼ごっこに入れてもらわない？」とさそってみた。「ううん。」と首をふってY子は、教師に背を向けるような姿勢で絵を描き続けている。F教師はそんなY子を見て、『この子はいつも絵ばかり描いていて、ちっとも友達と遊ぼうとしない。なんとかしなくては。』という思いがますます高まってくるのを感じていた。

事例の中からF教師がY子をよい方向に指導しようと熱心にかかわる姿勢が読みとれます。しかし、それは、Y子の行動を尊重したりY子の気持ちに目を向けたりすることとは、少し違っているようです。F教師の目には、Y子の姿が“友達と遊べない子” “なんとかしなくてはいけない子”として映っているのかも知れません。このような気持ちで見ている限り、どのような教師の働きかけもY子の思いとは食い違ったものになってしまうでしょう。その結果、Y子はなんとも居心地の悪い思いを味わうことで自分らしい動きがとれなくなっているのだとも受けとめられます。言いかえると、教師の判断基準からだけ幼児の行動を見ているとその幼児の心の動きがくみとれなくなるということです。



幼児のありのままの姿に温かい関心を寄せるということは、一人一人の幼児が自分から伸びていく力を持っている存在であることを信頼することから始まります。教師の目にはどのように映っても、その幼児には意味のある行動なのです。“そんなことしないで” “もっとこうしたら”と言いたくなったときにも少し待ってその幼児のするこ

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

とを見守ってみることが必要です。そうすると今までわからなかった行動の意味やその幼児らしいやり方で実現しようとしていることが見えてくることがあります。教師の思いだけで指示したり規制したりしないでよかったと気づくのはそんなときでしょう。幼児を信頼する教師の姿勢は“待つ姿勢”や“見守る姿勢”につながります。それはまた、ゆったりとした自由感や安心感、温かい雰囲気を生み出すことでもあるのです。

しかし、“待つ”“見守る”ということは幼児のすることをそのまま放置して何もしないことではありません。幼児の言動や発想、心の動きなどに最大限の関心を寄せながら期待を持って見守っていると、その姿勢は教師の表情やまなざしあるいは言葉や配慮となって現れてくるものです。それは、形だけのほめ言葉や激励、余計な手だしや口だしとは全く違った幼児へのかかわり方になるでしょう。

A教師は、どの幼児の動きにも心を配れるような位置にできるだけ居るように心がけています。B教師は、一人一人の幼児が様々な形で送ってくるサインを受けとめて応じるよう努力しています。それは言葉をかけることであったり、目で合図を送ることであったりしますが、その幼児がしていることの邪魔にならないように、そしてその幼児なりの道筋を自分の力で見つけていけるように心を配っています。C教師は、幼児の言動を表面に現れたことや結果だけに目を向けるのではなく、その幼児が感じていることや実現しようとしていることなどを受けとめようと心がけています。そのような姿勢で幼児と対しているとその子らしい持ち味やよさに気づくようになり、その幼児との間に温かい関係が創られていくことが実践できたといえます。

幼児の言動が、発見、感動、工夫、努力などプラスの方向に向かっているときには、誰でも温かい関心を寄せて見守ることができるでしょう。しかし、問題なのは、挫折、葛藤、情緒が不安定になるなどの姿に出会った時ではないでしょうか。そんな場面に出会うと教師の側にも“どうしよう”“何とかしなければ”などというあせりが起こりがちです。教師の気持ちにあせりがあるとどうしても幼児の行動に問題があるように見えてしまい、かかわり方も温かさに欠けたものになってしまいます。どのような姿であってもあせらずに温かく見守る教師の姿勢は、幼児の発達に対する深い理解と、自分から伸びていく力を持っている存在として幼児をみる目にささえられて生まれてくるものです。

(2) 心の動きに応答する

「心の動きに応答する」ということはどういうことでしょうか。それをまず考えてみましょう。

私たちは日常しらずしらずのうちに、結果を重視するようになっていきます。「何かが出来ること」を大事にするようになってきています。

ですから、幼児が何かに取り組んでいると、つい、早く結果にたどり着いて欲しいと期待します。そのため、「がんばれ、がんばれ」といった言葉をかけたくくなります。それで「がんばろう」という気持ちになってがんばれる幼児もいるかもしれません。しかし、幼児の心にそっていないときはどうでしょうか。幼児によっては、単に取り組んでいることを楽しんでいる場合もあるでしょうし、もうそろそろ他の事に移ろうとしている時かも知れません。その時でも、「そんなこと言ってないで、もう少しだからがんばりなさい」と言ったとしたらどうでしょうか。教師は「ここであきらめさせてしまうのはおかしい」「最後までやり通す習慣をつけなければ」というように感じるのかも知れませんが、幼児は、教師の言葉を「うるさい」とか「いやだな」などと受けとめることもあるでしょう。また、しかたなくその言葉通りにがんばってみたところで、自分のことを本当にわかってくれない教師との気持ちのずれは大きくなります。

公園などで、母親と幼児の次のような姿をみかけることがあります。

高いすべり台に、興味のおもむくまま登ってしまい、怖くなって降りられなくなった子供に対して、母親は「怖くないから滑っておいで」と声をかけます。でも、励ましてもなかなか降りて来られない子供をみると母親は、

さらに励ましの言葉をかける。

↓

段々と語気が強くなる。

↓

「しょうがないわね」と言いながら抱きおろす。

こういった体験を積み重ねるうちに、親の中には「うちの子はおくびょうなんだか

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

ら」とか、「依存心が強くて困る」といった気持ちが芽生えるでしょう。また、子供の中には「自分では出来ない」「怖いときにはあきらめて全部おかあさんにやってもらうしかない」「自分はどうせダメなんだ」というような気持ちが出てきます。いずれにしても、この子は、当分の間すべり台に登ろうとする意欲をなくすでしょう。

母親の目からすれば、こんな高さから滑るのは怖くないはずだと思うのでしょうか。

しかし、“何かが怖い”という気持ちは、他人がどう思おうと本人にとってはどうしようもないことなのです。いくら他の人に怖くないと説得されても消えるものではありません。言われれば言われるほど恐怖心が高まったり、その相手に対する不信感をもったりもするものです。

ここでもう一人の母親の応じ方を取り上げてみましょう。

「おりられな—い」の声に「大丈夫よ」と言ってみたがやはり怖いようだ。

「高くて怖くなったの」と母親。

↓

「お母さん来て—」という。

↓

お母さんがすべり台を登っていく。

子供の後ろに座る。

↓

子供は母親の足に挟まれて安心して一緒に「ビュー」と滑り降りる。

↓

また登りたがる。

↓

今度も母親と一緒に滑りたがる。

母親は一緒に滑る。

↓

三回目。今度も母親と一緒に。しかし、母親が子供の後ろに座るやいなや、サッと滑っていく。母親との距離が空く。

↓

そして、四回目には母親を待っておられず、どんどん先に登って行って、一人で滑り降りてしまう。それからは自分一人で滑る。

1. 心の動きにそう

チューニングという言葉があります。日常的にはラジオやテレビのダイヤルを電波の周波数に合わせることを指します。育児や保育でもこのチューニングが必要なのです。すべり台の例でも、子供の心の動きに呼吸を合わせて応じていくと、子供が少しずつ、自分のテンポで繰り返しながら歩き出す様子が感じられるでしょう。

事例の「母親」を「教師」に置き換えても同様のことが言えます。

私たち教師はともすると、幼児の行動に対して“何をしているのか” “もっと上手にできるようにするには” “この遊びをどう発展させようか” など表面に現れた事柄に目を奪われて、それに応じることに終始しがちです。また、何かができるようになることや新しい知識を与えることだけに目を向けてはいないでしょうか。

幼児の時期に大切にしたいことは、環境とのやりとりの中で様々な出来事に心を動かして自分からかかわろうとする気持ちを育てることです。そこでまず必要となるのは、効率の良いやり方や解答を知識や練習の課題として与えることではなく、心の動きに対して柔軟な応じ方をすることです。言葉をかえれば、教師が「答」を示すのではなく、幼児の心の動きにそって「共に心を動かしたり、知恵を出し合ったり」するかわり方が求められるのです。



もちろん、幼児の心の動きは、ある場面だけで感じとれるものではありません。その場の状況だけでなく、生活の流れの中で幼児が伝えようとしている気持ちを推し測っていかなければならないのです。心の動きにそった教師の応答は、幼児と生活を共にしながら心の動きを感じとろうとする過程の中で生まれてくるものです。つまり、教師の応じ方はすべて、幼児の内面を理解することと表裏一体となっていて、切り離すことはできないものなのです。

心の動きに応じるためには、教師自身の自己訓練が必要です。自分の保育を見直したり、ビデオなどの映像を通して幼児の心を感じとり、自分の幼児とのかかわり方を振り返り気づくことから始めなければなりません。

その際に必要な教師の姿勢として「受け入れる（受

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

容)」ということがあります。「受け入れる」ことは、相手の言いなりになることではありません。人はそれぞれその人なりの感じ方を持っていることを認めたくて、自分の感じ方や考え方と異なっている、その人にとっては意味のあることとして大切に受けとめることです。

そのことが、相手の話に最後まで耳を傾けたり、行動を見守ったりする教師の行為につながるのです。本当に相手を「受け入れる」には、相手がどのような状態にあるのかを感情のレベルで感じとることが必要になります。泣いている幼児を目の前にした時、なぜ泣いているのかとその理由ばかりを詮索するのではなく、泣かずにはいられない気持ちをまず受けとめながら、どれほど悲しいのか、くやしいのか、なぐさめてほしいのかなどを感じとるように努力することが大切なのです。いわゆる相手の心に共感することの第一歩がここにあります。

実際には、相手の心に近づくことは、簡単にできることではありません。もともと、自分以外の人を完全に受け入れたり、すべてその人のように感じたりすることは不可能なことでしょう。大切なのは、そういうことを心がけて努力することなのです。教師の考え方に当てはめようとするのではなく、教師のかかわり方に対する幼児の反応を確かめながら、どのくらい相手の心に近づけたか、あるいはどのくらいズレているのかを自分で気づいて、自分らしい応じ方を生み出していくことが大切なのです。



(3) 共に考える

一人一人の幼児の感じ方や発想を尊重して、幼児と共に考えようとする教師の姿勢が大切であることはすでに述べた通りです。

しかし、ここで言う「共に考える」ということは、教師の考え方やイメージを押しつけたり、正しい答えが早く見つかるように誘導することではありません。あくまでも教師のもっている枠組みをひとまずはずして幼児の今やろうとしていることや心の状態に肯定的な関心をもつ努力をすることから出発し、その幼児の歩みに寄り添って考えていくことなのです。

保育の中で幼児が課題を見つけ、それを乗り越えようとしている姿に出会った時、教師はどのように援助すればよいのでしょうか。一つの事例を通して考えてみましょう。

事例 ジューソーケンを作りたい

W教師は、T男に何かを作りたいと訴えられているのだが、さっぱりわからず困っていた。“ジューソーケン”を作りたいとT男が言うのだが、W教師は“ジューソーケン”(TVマンガの主人公が使う魔法の笛)を知らなかった。

T男の身振りやその場の状況からいろいろと推測してみるのだが、どれも違うらしい。とにかく何かを作り出そうとするT男の気持ちとイメージを大切にしてそれが実現できるように援助していこうとW教師は思った。そしてT男と一緒に紙を使って作り始めるが、T男のイメージとはどこか食い違うらしい。W教師は一生懸命T男の思いを受けとめようとするが、出来上がった物はW教師の考えていたこととは程遠いものだった。それでもT男は大満足で友達の中に入っていく。

W教師は友達とのやりとりを聞きながらT男にとって“ジューソーケン”を作ることが友達と遊ぶためにどうしても必要なことだったということに気づいていく。やっと“ジューソーケン”の意味を感じとったW教師はT男に対して「音楽が聞こえたらT男君が先生を呼んでいるっていうことね」と話しかけてくる。

事例の中でW教師は、T男の実現したいことが何かがわからないまま、T男と一緒に

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

の行動をとることによってその思いを汲みとろうとしています。そして、ひたすらT男の思いが実現できるようにアイデアを出したり実際に手伝ったりしているのです。そんなW教師とも触れ合いの中でT男は自分のもっているイメージを何とか表現しようとしています。結果としてみれば、出来上がったものは、T Vの画像とは全く似ていないもの



のだったかも知れません。でも、それはT男にとってまぎれもなく“ジュースーケン”なのです。先生は、自分の考えや思いを受けとめて一緒にいろいろと支えてくれるという実感がT男の充実感や満足感となっているのでしょう。

「共に考える」ということは言葉のレベルだけで意見や知恵を出し合うことではありません。この事例に見られるように相手の立場にたって、相手のテンポに合わせて考えようとする姿勢が必要となるのです。言い換えれば、相手の思いや考え、つまづきなどを理解しようと努力することでもあるでしょう。W教師は事例の中でT男の作ろうとしているものを一緒に作ることを通して考えていこうとしています。同じことをやってみることや肌の触れ合いなどによって、体の動かし方や視線といった言葉にならないサインを感じとろうとしているのです。

もちろん、教師は幼児一人一人の発達を促すための適切な援助を行わなければなりません。もし教師が一方的に「ジュースーケンはこうやって作るのよ」と作り方を教えてしまったとしたらどうでしょうか。たしかにT男はもっと早く友達との遊びに入れたかもしれません。でも、それでは自分のイメージをもとにして自分で考えて作ったという充実感を味わうことはできないでしょうし、自分の力で課題を乗り越えようとする態度を育てる援助とはならないでしょう。結果よりも、むしろ幼児の心に寄り添いながらその幼児らしい考え方や思いを大切にしながら一緒に過ごす時間が必要なのです。

幼児の行動や思いをありのままに認め期待をもって見守りながら、教師の気持ちや

1. 心の動きにそう

知恵を幼児の心の動きにそって素直に、しかも相手に伝わるように言葉や行動、表情などで表現したいのです。自分の考えや思いが受けとめられた喜びを味わいながら教師と一緒に考える時間を過ごしたという体験は、幼児が自分で考え行動しようとする気持ちをもつためのベースとなるものです。

次の事例は、当番をめぐる学級の幼児たちと考え合った記録です。

5歳に進級し、年長になったのがうれしい二日目。

K 「せんせい、おはよう！ぼくいちばん！今日お当番だね。」

教師「Kくんおはよう、今日はKくんお当番なの？」

K 「うん、だってまえのクラスのときは、そうだったんだよ。」

教師「そうか、わかった。みんなにも相談してみようね。」

本当は、年長組の生活に慣れ、友達関係も落ち着いてくるまでは、動物の世話も、弁当の準備も、やりたい幼児がやっていったらいいと考えていた。けれども、K君のこの発言から、「前がそうだったから」ということではなく、「これからのことはみんな考えていこうよ」ということを伝えようと思った。そこで、遊びの片付けの後、みんなが集まった機会に当番をどうやって決めればよいかを相談することにした。

K 「前の通り、早く来た3人がお当番でいい。」

T 「それじゃ、お母さんが遅く来る人は一度もなれない！」

E 「早く来ればいいんだよ。」

N 「赤ちゃんいる人たいへんだよ。」

M 「K君は、家近いからずるいよ。」

U 「何でもできる人と、一度もできない人いるのはだめだよ。」

H 「順番にしようよ。」

K 「なんでも順番ていうのは、いけないんだよ。」

W 「じゃあ先生が決めるの。」

教師「先生だけで決めるの？」

A 「先生が決めるんじゃないよ。」

K 「だって、前そうだったんだから！」（泣き出しそう）

R 「わたしだって、やりたかったのに年少のとき一回しかできなかったんだから。」

教師自身が思った以上に幼児たちの当番への関心は高く、次々と意見がでてきた。

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

一人一人がよく考え、今まで感じていたことを伝えようとしている姿に感動しながら発言している幼児と視線を合わせうなずきながら聞いていた。そして、これまで自分が当番についてあまり深く考えていなかったことに気づかされ、本当によかったと思った。この機会に、一人一人の気持ちを受けとめながら自分も皆と一緒に考えてみようと思った。

教師「お当番って、本当に決めた方がいい？」

R 「お弁当のとき、テーブルを拭く人はどうするの？」

T 「モルちゃんのお世話だって、困るじゃない。」

教師「やりたい人がやったらどうかなあ。年少組の最初の頃はそうだったでしょう。」

U 「でも、みんな、やりたいやりたいってけんかになるんだよ。」

教師「そうか、それは困ったねえ。じゃあ、『やりたくない』という人はいないのかな？」

T 「そんな人いないよー。」

M 「やりたいよねえー。」

教師「Jくんは？」

J 「ぼく、アレルギーだからモルモットは苦手なんだよなあ。」

E 「そういう人は、野菜切る係すれば？」

教師「そうか…。じゃあ、みんなはお当番があった方がいいと思うのね。」

「うん。」「あったほうがいいなあ。」

この事例では、当番をどうやってきめるかについての最良の方法は出ていないようです。とりあえず教師が係を作って交代でやることを提案したということですが、きっとやりながら新しい問題がでてくことも予想されます。しかし、自分たちのこととして一生懸命に考えを出し合ったり気持ちを伝え合ったりしたことが幼児にとって「当番」の意味を違ったものにしたにちがいません。同時に大切なことは、当番について教師の考え方が変わっていったことです。

「共に考える」という教師の姿勢は、幼児の思いや考えを実現するためだけでなく、幼児に学びながら教師自身を高めるためにも必要なことともいえるでしょう。

(4) 集団のつながりを育てる

一人一人の幼児の発達には、同年代の幼児と教師が、共に生活することによって促される部分が多いと考えられます。集団生活の中で幼児同士がよい刺激となり、モデルとなり合って育ち合うのです。そのような育ち合いがなされるためには、その集団が一人一人の幼児にとって安心して自己を発揮できる場になっていなければなりません。

幼児は、周囲の人々に温かく見守られ、ありのままの姿を認められている場の中で、自分らしい動き方ができるようになり、自己を発揮します。幼稚園における教師の重要な役割の一つは、教師と幼児、さらに幼児同士の心のつながりのある温かい集団を育てることにあるといえます。

お互いの信頼感で結ばれた温かい集団は、いわゆる集団行動の訓練のような画一的な指導からは生まれてきません。集団の人数が何人であろうとも、その一人一人をかがえのない存在として接する教師の姿勢から生まれてくるのです。

様々な活動を思い思いに展開しながら、幼児は絶えず教師にいろいろなサインを送り、メッセージを発しています。その思いを受けとめることでどの子も受けとめられる喜びを味わうと同時に、受けとめる教師の姿勢をも無意識の内に自分の中へ取り入れていきます。

次に示す二つの事例は、A教師の保育日誌の一部です。一人一人の幼児の感動や思いを温かく受けとめている教師の姿勢を読みとることができます。

事例 7月13日(火)

メダカが卵を産んだ。本には10日位でかえると書いてあったのになかなかかえらない。家庭に帰っても話したらしく、卵に関する話題はつきない。「親と別にしておいた方がいいんだって、たにしも水が汚れるから別にした方がいいって。」などの情報もあって卵だけ別にしておいた。

そして今日、「アッ！メダカの赤ちゃんだ。」「えっ、どこどこ？」「見えないよ」「ほら、そこ」「どこ？」「はっぱのそばにいるじゃないの。」「いた！」「うわーかわいいねえ」「目だけしかないみたい。」「体が透き通っているね。」「横から見るより上からの方がよく見えるよ。」等々。

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

アッという間にメダカの誕生のニュースは学級中に広まり、小さな水槽を囲んで大騒ぎ。一人一人が自分の感動を教師や友達に伝えようと表情豊かに語りかけてくる。そのひとつひとつをしっかりと受けとめ、応じていくうちに、私自身の感動も大きくなっていく。みんなで期待して待っていただけに本当にどの子もうれしそうだった。それにしても、情報の伝達の速さには驚かされる。感動は人に伝えてさらにふくらむのだろう。

「先生、竹の子が大きくなったよ、早く見にきて。」「さなぎがチョウになってる！」など、幼児は感動したこと心動いたことは誰かに伝えたくなり、伝えることで表現の意欲も増していきます。この事例のF教師は日頃から、思わず伝えたいくなるような多くの体験をし、感動を自分なりに表現し、そのことを先生や友達と共有し合えるようにしていきたいと考えています。温かい関心を寄せて見守られ、共に考えたり、共感したりすることにより幼児自身も相手の立場を考えるようになり、心の動きを受けとめられるようになるのではないのでしょうか。



事例 9月22日（水）

リレーに熱が入って今日で三日目。クラスで一番足の遅いS夫。3回やってもS夫のチームは、差がついて一度も勝てない。4回目には一緒にやっているY夫は“勝ちたい”気持ちが高まってきており、自分が1番走者を引き受け、2番走者のS夫にバトンを渡す。相手よりY夫の方が2～3m位早くS夫にバトンタッチしたので、相手より早くスタート。今度はそのまま抜かれずに次の子にバトンタッチした。結果的には負けてしまったのだが、今までよりは差は縮まっていたと教師も思った。

1. 心の動きにそう

終わった時、Y夫がS夫に「おまえよくがんばったな」と声をかけていた。S夫はともうれしそうに「がんばった、がんばった。」と体をはずませていた。この2人の言葉がとてもうれしく、心が温かくなる。保育室にもどってから私は、Y夫がS夫が頑張ったことを認めてくれて、すごくうれしかったとみんなに伝えた。

S夫は友達に認められることの方がずっとずっと心にひびいたと思われます。ここで大切なことは、F教師が、S夫の思いもその思いを受け入れているY夫の気持ちも大切にしながら、そのことを学級の“みんな”へ伝えていることです。リレーに勝てればさらにうれしいだろうと思いつつも、ある子が“努力している”ことを周囲が認めているということをもっとも大事に考え、そのことに教師自身が喜びを感じているのです。

このように、どの幼児も集団の一員として大切に接する教師と生活を共にする中で、幼児はお互いを大切にする姿勢を身につけていきます。そのことがやがて、心のつながりをもった温かい集団を作り出すことにつながるのです。

集団のつながりを育てるといっても、そのための特別な方法があるわけではありません。F教師の例にもみられるように、一人一人の内面を理解し、その幼児の立場に立って考えようとすることや、心のつながりを大切にしようとする教師の姿勢が必要なのです。



(5) 保護者との信頼関係を築く

幼児の発達にとって、幼稚園の教育と家庭での教育とが共に大切な意味をもっています。保育の営みはまさに家庭との連携を抜きにして考えることはできないのです。また、幼児を取り巻く家庭の人々が、幼稚園や教師に対してどのような気持ちをもっているかは、幼児の心に微妙な影響をもたらすことが多いものです。例えば、母親が自分の担任の教師に信頼感をもっていればその幼児は幼稚園生活を安心して十分に楽しむことができるでしょうし、反対に不安などがあるとすれば幼児は担任の教師に心を許すことができないでしょう。そのため、保護者との信頼関係を築き“この先生なら”“この幼稚園なら”という安心感・信頼感が感じとれるような、保護者との信頼関係を築いていくことが必要なのです。

教師と保護者との信頼関係は、日常のふれあいの中で育てられていきます。日常の幼稚園生活を振り返ってみますと、朝の登降園時の対応、保護者会、個人面談、電話でのやりとりなど、教師と保護者とがふれあう機会がとても多いことに気づきます。そのちょっとした対応の仕方や話し方でも、保護者が教師に信頼を寄せてくれることがあります。反対に、熱意のあまり一方的な連絡になったり、家庭に過度な要求を出したりすると簡単に信頼関係がこわれることもあります。また一方で、保護者から相談をもちかけられたり、意見を言われたりすると、どうしたらよいのかとまどうこともある、という教師の悩みが聞かれるのも現状です。

では、保護者との信頼関係を築くにはどのような教師の基本姿勢が大切なのでしょうか、事例を通して考えてみましょう。

4歳児のT子の母親から、T子をR子と遊ばせないで下さい、という電話がかかってきた。R子がいじわるだから幼稚園に行くのが嫌だと言うのだそうだ。

「うちの子、気が弱いからきつとR子ちゃんにいじめられても『嫌だ』って言えないのだと思います。」という母親の話であった。

N教師は、母親の話を聞きながら、T子の姿を思い出していた。どう考えてもいじめられている感じは受けない。むしろ元気がよく、T子の方がR子をリードしている姿ばかりが目につかんでくる。そんなT子の幼稚園での姿を伝えれば安心する

のではないかと考えた。そこで、「幼稚園ではT子ちゃんはとても活発ですし、むしろR子ちゃんをリードしていますよ。」と話すと、急に母親の言葉がきつくなり、「表面的にはそうかも知れませんが、現に、幼稚園に行きたくないと言っているのですから…。先生の見えてないところに原因があるのではないですか。」と、逆にとげのある言い方で言われてしまった。

教師は、『安心させたい』と考えて話したつもりだったが、逆に保護者の心を閉ざし、不信感をもつようにさせてしまったようである。N教師は、思いがけない母親の態度にとまどったが、何とか母親との関係を取り戻したいと思い、素直に自分の気づいたことを話し、母親が電話で訴えようとした気持ちを理解しようと考え、翌朝、さっそく母親に話してみました。

教師「Tさん、ごめんなさい。私、元気なT子ちゃんの姿ばかり目に浮かんで、T子ちゃんが『幼稚園、嫌だ』って聞いて、驚いてしまって……。私が見落としていることがあると思いますので、少し時間をくださいませんか。」

保護者「あ、いえ、いいんですよ先生。……。私もびっくりして、つい、感情的になってしまいました。すみません。なんだか、あの子がかawaiiそうになったもので……。」

教師「そうですよね、心配になりますよね。」

保護者「そうなんです。先生、よろしくお願いします。」

なんとかわだかまりがとれた様子に、N教師は、思い切って話してよかったとほっとした気持ちになった。

私たちはともすると、相手から投げかけられる言葉が自分の考えていたことと食い違ったり非難されていると感じたりすると、それを無意識のうちに振り払おうとしたり、避けて通ろうとしたりすることがあります。反対に、自分の気持ちを受け入れてくれる人の前では、安心して本来の動きがとれるようになります。このようなことについては、保護者も教師も変わりません。お互いの間に信頼関係を築くためには、日常のひとつひとつの機会を大切にして、まず、『相手の立場にたってみること』『相手の話す事柄だけでなく、その気持ちを受けとめようとする』などの姿勢が必要となります。

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

教師の姿勢として大切なことをまとめてみると次のようになります。

- ① 何でも話せる雰囲気を作る。教師として何かを指導しなければいけないと思っていると相手の心は閉ざされてしまう。相手の話をゆったりと最後まで傾聴し、そのありのままを受けとめていく。
- ② 一人一人は保護者にとってかけがえのない存在である。事柄にとらわれず、保護者の気持ちを大切にする。
- ③ 子供の姿のよい点や伸びる可能性を中心に話すようにする。

これからの幼稚園教育においては、保護者の様々な相談に応じる教師の役割が、ますます重要になります。そのような場合にも忘れてはならないのは、心のつながりを大切にして、考え合い話し合う姿勢をもつことであり、それが保護者が教師に親近感や信頼感を寄せる原点となるでしょう。



2. 教師自身に目を向ける

保育の営みの中で大切なことは、一人一人の幼児の心に近づこうと努力し、どのような姿に出合っても、そこから目をそらさずに、今ある姿を基点にして、発達を促す援助を考えることです。しかし、目の前にある幼児の姿は教師とのかかわりの結果として生まれてくる部分が多いものです。つまり、幼児の内面を理解し、一人一人に応じた適切な指導を行うためには、教師自身に目を向けて自分はどのような姿勢で幼児とのかかわっているのか、なぜそのようなかかわり方をしたのかなどに気づいていくことが必要なのです。ここでは特に幼児とのかかわり方を生み出す背景となるものについて考えてみることにします。

(1) 自分のかかわり方に気づく

E教師の学級では、数日後の運動会をひかえてクラス対抗でするリレーに子供たちは夢中になっていました。はじめは作戦を練ったり、顔を赤くして走る子供たちをほほえましく見守っていたE教師でしたが、運動会が近づくにつれて自分も仲間になってというよりは、むしろ先頭に立って頑張る姿勢になったようです。そんな時、突然、一番前に並んでいたY男が「やりたくない！」と泣き出したのです。E教師は思わず「どうして走らないの？全員が走らないクラスは参加できないんだから、A組はやるのやめよう！」とY男の頭の上で言いきってしまったのです。案の定子供たちは、「えーっ、やりたいよう！」「だって、あんなに練習したり作戦立てたりしたのに…」「Y男がいけないんだよ！」「なんで、やりたくないなんて言うんだよ。みんな、がんばってきたんだよ！」「おまえがそんなことを言うからできなくなっちゃうじゃないか！」と口々に責め立てます。「これはまずい…！」と思いながらも、E教師の頭の中は「Y男をなんとか説得して走らせなければ」という気持ちで混乱してしまいました。E教師は普段から一人一人の幼児の気持ちを大切にしようと努力しているのですが、なぜこんな言葉をかけてしまったのでしょうか。

何よりもE教師の心に浮かんだのは「本当に運動会にY男が走らなかったらどうしよう」ということだったそうです。「保護者はどう思うだろうか、他の組の教師は

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

…」など運動会の日の悪い予想ばかりが頭の中を駆けめぐったと言います。きっと目前にセマった運動会という大きな行事のプレッシャーがE教師を焦らせ、Y男の気持ちを無視した言葉をかけさせてしまったのでしょう。もしかすると、そんな焦りが無意識のうちにE教師の言葉や態度をいつものものと違ったものにしていたのかもしれませんが。Y男はそんなE教師の気持ちを敏感に感じとってリレーが楽しくなくなったり、運動会への不安が大きくなってしまったのではないのでしょうか。ほかの幼児のY男を責める言葉もこんな背景から生まれてきたものでしょう。

この事例で、教師にとっては行事がプレッシャーとなっていますが、人によって緊張や焦りを生み出す背景は異なります。たとえば、他の人に見られたり、評価されるのではないかと感じる場面になると、幼児とのかかわり方がぎこちなくなってしまう人もいますし、自分が周囲から非難されたり攻撃されそうだと感じると、思わず自分を弁護することに気持ちが向いて相手の気持ちを無視してしまう人もいます。



また、特別のことがなくても例えば、常に幼児に言葉をかけたり、何か手伝ったりしないと落ち着かない、教師のイメージ通りの活動をさせようと無意識のうちに働きかけてしまう、活発な幼児とは一緒に遊べるのに静かな幼児は苦手であるなど、幼児とのかかわり方にはそれぞれの教師の個性が現れたりもします。

いずれにしても、完全な教師など存在しませんし、自分のかかわり方に気づいたからといって即時に変えることも難しいことです。しかし、目の前の幼児の姿から、自分のかかわり方をふり返り、仮に問題があると思われる時にはなんとかそれを乗り越えようと努力することが大切です。こうしたことにより、一人一人の幼児へのかかわり方が温かいものになり心のつながりが深いものになっていくのです。

(2) 心の健康を保つ

幼児とのかかわり方を生み出す背景の一つに教師の心の健康があります。生活の中で起こる様々な出来事で教師の心が不安定になっていると、目の前の幼児の気持ちが見えなくなったり適切なかかわりができなくなったりします。

心が健康である時には、多少困難な出来事に出合ってもプラスの方向に考えることや柔軟な対応で乗り切ることができます。

前述のリレーの事例も教師の心の状態と幼児とのかかわり方の関係を示すものと言えるでしょう。保育は教師と幼児との心の交流を通して幼児の心を育てる営みですから、教師自身の心の健康を大切にしなければならないのは当然です。

心の健康は身体の状態に左右されることがあります。体調がすぐれない時に、いつもは気にならないようなささいな事でイライラしたり、気短かになったりすることは誰でも経験することでしょう。日常生活の全体を通して体調を整える努力をすることは、一人一人に応じる適切な指導を生み出すためにも、とても大切なことです。

また、日常の生活を心豊かに送ることが、心の健康にとって大切な要素となります。心を健康に保つということはバランスを保つことでもあり、自然に思いきり触れる、良い絵や音楽に触れる、スポーツをするなど保育以外の場で気持ちの転換を図り、新鮮な心で保育に臨めるようにする必要があります。

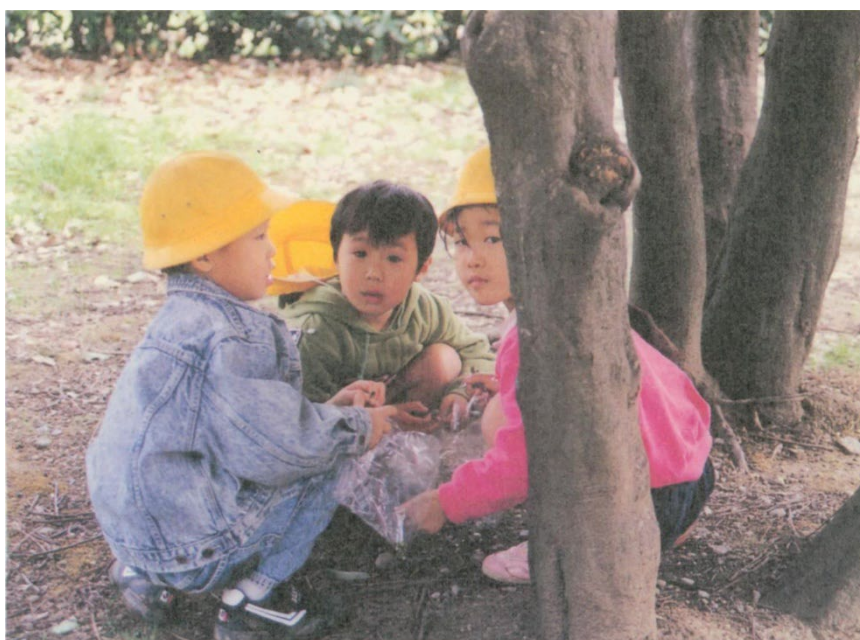
C教師は、職場の人間関係をとても大事にしています。保育や降園後の仕事の進め方などで、どうも納得がいかない時などは、同期や先輩の先生たちに話し、一緒に考えることで解決していくことが多いといいます。そんな時のC教師は、答えを求めているのではなく、聞いてもらい、『そうだね』とうなずいてもらったり『大丈夫だよ』という安心感が欲しいのではないのでしょうか。自分では気づかない欠点も信頼できる仲間にいわれると素直に聞けるような気がし、『自分だったら……』という意見を言ってもらうことでヒントをもらえることも多くあります。それで、C教師も他の人が困っている時には、なるべくその人の気持ちになって親身に話を聞くようにしています。心の健康は温かい人間関係の中で保たれていきます。何でも心を開いて話し合える、考え合える教師集団であれば、その雰囲気はそのまま保育の場に生かされていくでしょう。しかし、温かい人間関係は最初から存在するものではありません。自分自身が

第2章 一人一人に応じるための教師の基本姿勢

周囲との人間関係を作り出す努力をする必要があります。

第3章

一人一人に応じる指導の 実際（実践事例）



第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

この章では、「幼児一人一人に温かい関心を寄せ、心の動きに応じる」ということについて、実践事例を通して具体的に考えていくために、実践の中で苦勞し努力している保育事例を取り上げました。もちろんこれはモデルではありません。これらの事例をもとに、話し合ったり、考え合ったりして、教師としての専門性を高めていただきたいと思います。

事例1 内面の心の動きをとらえながら

幼児一人一人に応じようと努力はしているものの、それぞれの時期に育てたいねらいばかりが気になり、目の前の幼児の思いに気づかなかったり、幼児の内面の欲求に気づかず表面的な要求に応じてしまったりすることがあります。また、その幼児の発達について日頃気になっていることに結びつけたりして一方的な援助をしてしまうこともあり、実際には、なかなかうまくできません。この事例は、一人一人に応じた指導を展開しようとして、結果的には一人一人に応じていないことに気づいていった事例です。

この事例を通して、教師のどのような姿勢が一人一人の幼児に応じる援助を阻むのか、幼児の心の動きをとらえながら考えてみましょう。

〔「入れてくれないの」 4歳児 11月〕

①「J君はだめ」

J男は、K男とS男の積木遊びに入りたいが「入れてくれない」と私のところへ訴えてきた。K男とS男はとても気が合うらしいが、2学期の半ば過ぎになってもいつも2人だけで遊んでいるのが気になった。私はJ男を仲間にいれて遊ぶことによって新しい関係ができるいい機会ではないかと思い、J男をいれてくれるように頼もうと2人の所へJ男と一緒にいった。今日はK男がリードしながら積木ですべり台を作っていた。三角の積木で斜面を長くのばしていく。S男が滑ってでき具合を試す。その真剣な様子は、誰も入っていく余地がない程である。私は思いきって「ね、J男君一緒に遊びたいんだって。入れてあげてね。」と声をかけた。K男は「J君はだめ。」と強く拒否した。私はK男のかたくなな態度が気になり、直さなければと思い「そんなこと言うとJ君がかわいそうよ。いじわるしないで入れてあげ

てよ。」と言い残してその場を去った。

②「J君はいつも壊すんだから」

ところが数分後、J男の大きな泣き声が聞こえてきた。私は飛んでいくとすべり台はめちゃくちゃに壊れていた。K男は悔しがって涙を流し「だから僕いやなんだ。J君ったらいつも壊すんだから。」と怒っている。その言葉に私ははっとした。そういえば、J男は自分で作ることにはしないでいつも面白そうな遊びにかかわっては壊すことが多かったと思う。仲よく遊ばせたいと思い、拒否することを単純に悪いときめつけ、J男の気持ちを尊重したつもりのかかわり方だったが、はたしてこれでよかったのかと考えてしまった。

〔事例1から読みとれること〕

なぜK男は「J君はだめ」と言ったのでしょうか。いつもJ男に作ったものを壊されてきたK男にとっては当然の対応だったかもしれません。しかしこの場合教師は、友達に対して拒否する行動を一方的に問題視しきめつけて指導しようとしてしまいました。K男が「J君はだめ。」と言った言葉に耳を傾けていれば、もっと適切にかかわることもできたのではないのでしょうか。日頃のJ男の行動の傾向をとらえていたにも関わらず、仲よく遊ばせたいということだけを考えてしてしまったため、J男が自分の日頃の行動に気づくチャンスも失われたと言えましょう。

幼稚園は社会性を身につける所、だから友達と仲よく遊ばせたい、早く遊ぶようにさせなければという願いは、教師はこのほか強くもっているかもしれません。また、この事例のように○歳の○学期はこうあるべきだという教師のもののさしに合わせ、幼児の生活の姿をとらえ、それに向かって援助することが多いのではないのでしょうか。しかしこのようなことでは、一人一人の幼児に応じる指導とは程遠くなってしまいます。

J男が「J君はだめ」と言われてしまった時、教師はJ男にどのようなかわりが必要だったのでしょうか。この事例では、一見、J男にかかわったようにみえますが、物理的に行動を共にしたり口添えをしただけであり、J男の気持ちを本当に受け入れていたかどうか疑問です。たとえば、J男が2人の遊びに入ることが大事なことであったとすれば、教師が入れてあげてと頼むのではなく、J男自身が2人へ意思表示を

第3章 一人一人に応じる指導の実例（実践事例）

するようになることを重視すべきであったでしょう。更に、J男を受け入れることを納得しないK男の気持ちを受け入れたり、2人の製作への心のはずみとか喜びを大切にして共有したりする方が必要なことであったかもしれません。またJ男が、今まで自分の力でものを作る経験がなかったとすれば、教師も一緒に遊びの仲間に入りながら、ものを作る楽しさを共に味わうことが必要でしょう。

一人一人の幼児に応じることは、一人だけに応じるということではありません。一人の要求をすぐに受け入れて実現させようとするということでもありません。

幼児の内面の心の動きをとらえながら、幼児一人一人にとって発達に必要な経験とは何かを教師が見据えることがきわめて大切な課題であると言えます。今、その方向に向かって、どんな援助をどのようにしたらよいかが問われているのです。



事例 2 あるがままの姿を受けとめて

担任にとって、一人一人の幼児の育つ姿を確認できるときくらいうれしいことはありません。それに気づくと、つい、そのことばかりが目映ってしまいがちです。

この事例は、このような悩みをもった教師が、それを乗り越えていく過程が述べられています。教師が自分のかかわり方に気づき、あるがままの姿を受けとめながら、かかわり方を変えていく過程をとらえ、一人一人の幼児に応じる援助のあり方について考えてみましょう。

〔「えっ、先生、見てたの」 5歳児 9月〕

①A男が、おもしろい遊びをみつけて

最近、A男は、B男、C男、D男たちの仲間に入り遊ぶ姿が見られるようになってきたが、友達のいうなりになって遊んでしまうことが多く、気になっていた。

ある日、A男は、私に回転寿司屋ごっこがしたいと言いに来た。私は、A男に、自分がしたいことが十分できるように援助することで、A男が周りの友達にも、認められるようになるのではないかと考え、一緒に材料を探したり、A男が場作りをしている姿をそばで見たりしていた。そこへ、B男ら3人がホールにいるA男に「お前、何してるんだ。おれたちサッカーしてたんだよ。」と、近寄ってきた。それを聞いて、A男は「回転寿司屋ごっこするんだ。」とうれしそうに答えている。私は3人にA男のやっていることに気づいてもらうために「A男君、本物そっくりのお寿司作ったんだよ。ほらこの台が本当に回るよ。」と言った。3人は、私の話に興味をもち、次々とA男の仲間に入った。A男が寿司屋のお父さん役になると、B男たちは寿司屋の子供役になった。そして、「子供部屋はここね。ここ机で、ここにボールを置こう。」などと、すっかり寿司屋の一員として家作りを楽しみだした。

②B男たちとトラブルに

その翌日、登園するなり、ホールに走っていった4人をみて、私は回転寿司屋ごっこの続きをするのだらうと思っていた。ところが、しばらくするとA男が、困り果てた顔をして、私を呼びに来た。A男と一緒にしてみると、ホール中に、皿や

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

カップが投げ散らかされていた。B男たちは、なぜこの遊びを壊したのだろうか。3人は、無理に子供役として遊びに参加したものの、この遊びにあまり興味がもてず、店の品物を投げつける行動で表したのかもしれない。3人の行動を問題にすることにより、事実をあるがままに受けとめていこうと考えた。

③事実を受けとめながら

私は、「まあ、すごい。これじゃあ、お客もびっくりだわ。お父さんが子供たちが暴れるって困っていたよ。あの、お寿司が食べたいと思って、お金持って来たけど、今食べさせてもらえるかしら。」と店の客になりきって、聞いてみた。ばつの悪そうに片付け始めた3人が、次々と私の回りに集まってきて、「あのね、僕たちは寿司屋の子供だから、店の手伝いはしないんだよ。」と言う。私は「そうなの。子供は店の手伝いはしないのね。」と言うと、「そうだ。今日は日曜日にしようよ。だから公園でサッカーしにいくっていうのはどう？」と言い、更に少し離れたところで腕組みをして立っているA男に「お父さん、公園でサッカーして来ます。」と明るく言って、ホールから出て行った。A男は3人が出て行ったことを気に留めるでもなく、その後、客が来なければ、「出前です。」と言って、保育室にいる友達の所まで、寿司を届けたりして楽しんでいる。私は、いつの間にかA男の肩をもつような態度を取り、B男たち3人のやりたいことや気持ちをちっとも認めていなかったのではないかと思えてきた。B男たちには、かかわらなくても、自分たちで遊ぶ力のある子供たちだからと思っていたが、そう思うことで心の距離まで遠くなっていたのではないか。3人が気になり、その後サッカーを見に行った。

戻ってくる3人に「お帰り。シュート、決まっていたじゃない。」と話すと「えっ先生、見てたの。」とうれしそうな顔で答えた。そして、「今度、先生も応援に来てよ。おやじが待っているから、もう帰らなくちゃ。」とC男があたふたと駆け出しながら、A男のいるホールに入っていく。そしてA男も、3人に「もう夜だよ。ご飯にするよ。」と言って、いそいそと迎えている。子供同志では結構つながりはできている。もっと子供たちを信じなければという気持ちでいっぱいになった。

〔事例2から読みとれること〕

この事例では、A男に対する「何とかして友達とうまく遊ばせたい」という教師の

思いが強く、必要以上に手を貸してしまったようです。また、教師の思いとA男の思いは一致していても、教師が遊ばせたいと思った3人とA男が選んだ遊びの興味は違っていました。同じことをして遊ばせたいという教師の思いと幼児の思いとがずれていたのです。それでも3人は一応は教師の気持ちを察知し、A男と遊び始めたのですが、我慢できなくなってしまうようです。一緒に遊ばせたいと願っても、そのために同じ遊びをさせることには問題があります。

教師は、3人が店を壊したことに驚いたものの、その事実をありのままに受けとめながら、それを乗り越えていこうとしました。事実をあるがままに受けとめて、ごく自然なかかわり方に変えていく教師の姿勢は子供たちの行動変化をもたらしています。すなわち、それぞれの幼児が自然な形で自分の思いを表せる遊びになってきました。教師の一人一人の思いを受けいれようとする姿勢が子供たちに伝わったからなのでしょう。一人一人の育つ力を信じなければと結んだ最後の言葉には重みがあります。

幼稚園が幼児期にふさわしい生活を展開する場であり、その中心である遊びが活発になってほしいとは誰もが願います。また、遊びこそ、幼児一人一人が自分の内面をありのままに表現します。遊びを通し友達とかかわりながら幼児はお互いのよさに気づき、その持ち味を出し合っていきます。その過程で幼児は満足感や疎外感などさまざまな感情を出したり、味わったりしながら育っていきます。教師が友達とのかかわり合いを重視し、必要以上に手をかすことで、友達同士の自然なかかわりをそこなうことにもなりかねません。幼児一人一人の育つ力を信じて接していくことが大切であり、幼児の表した行動の意味を探り、あるがままの姿を受けとめていきたいものです。



事例3 記録を積み重ねる中で

一人一人に応じていくためには、教師の幼児の見方やかかわり方が固定的な観念にとらわれるのではなく、目の前の幼児の姿にそって柔軟に対応できるものでなくてはなりません。そのためには、心の動きを感じとった反省や記録が重要な役割をもちます。

この事例は、4歳児の担任になったN教師の保育日誌の一部です。日誌に表された4歳児学級のエピソードを通して、N教師の一人一人に対する思いと、幼児に学び自己改革を図っていく姿をとらえてみましょう。

①5月18日 その子らしさをみつめる

カスタネットでいろいろな打ち方をしてみる。

私が「〇〇ちゃん。（タンタンタン）」とカスタネット打ちながら一人ずつ名前を呼び、カスタネットを打ちながら返事をしてもらった。いろいろな返事が返ってきた。

・「はあい。」とリズムカルにカスタネットを3回たたきながら返事をしたのは、K子。

・びっくりするくらい大きい声と元気な打ち方のJ美。

・みんな「はい。」とか「はいい。」の返事なのに、意外だったのはM夫。

M夫はみんなの中ではいつもそれほど目立たないけれど、満面の笑みで「ポンポコポン！」と言いながら元気にカスタネット打って答えている。

・E子のタタタタ…も楽しかった。E子は細かく打ちながら（タタタタ…）きれいな声で「はあい！」。

・T志は「ライダージェット〇〇！」といって最後に一発大きな音でタン！

M男の「ポンポコポン！」が格別うれしい。

私は知らず知らずのうちに「はあい。」と決まったリズムで返ってくることを予想していた。その予想を裏切ったのだ。本当に私の頭は固かったなあ。

普段、自分を出す方ではないM男やE子の存在がキラリと光った。

いつも無意識のうちにT男やJ子のような子供ばかりを取り上げがちな自分に気づかされたのである。一人一人のその子らしさをみつめることが本当に大切なことだ。そして、子供からのメッセージは、言葉だけでなく、いろいろなところに含まれているんだなということも感じた。

②6月18日 心が向きあうとき

数人の女の子がホールに行く外階段で、手すりの外側を登って行って外側の柱を滑り降りることに挑戦している。A香は階段の外側を登っていくが、上から柱へ移る勇気が出ず、逡巡している。手を伸ばしたり、足をちょっぴり出してみたり……。無理かな……。と降りてしまう。

数十分後、誰もいなくなったその場にいるA香を見つけた。ふとみるとA香がちょうど手すりへ移ろうとしている。慎重に手を伸ばし足を掛ける。もう一方の手がなかなか離れない。何度も体勢を整えて・・・できた！柱



に全身でしがみつく。その時に偶然に私と目が合う。ニコニコッと笑うA香。私も思わず「やったね、A香ちゃん！」と手をたたく。スルスルと降りてきて、私のところまで走ってきて、おなかのところに顔をくっつけんばかりのA香。私もぎゅうっと抱き締めてしまった。「初めてできたんだね！」と言うとコクリとうなずく。「こわかったね。」と言うと、また、照れたようにコクリとうなずく。「先生ね、心の中でガンバレガンバレって応援してたのよ。よかったね！」

朝、みんなでやっているあの場面をよくみていなかったら、こんなかわり方ではできなかったかもしれない。一人一人が見えたから、自分の中で意識できたのだと思う。子供の遊びというと、ごっこ遊びとか製作とか典型的なものだけを思い浮かべてしまいがちだが、遊びは生活体験のすべてだと改めて実感した。

③9月9日 ユニークな発想へのとまどい

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

ふと気がつくと、壁面にみんなで貼ったさかなが一つ残らずなくなってしまうている。部屋を見回すと…、あった、T男とK男が包丁で料理しているところ。

T男 「さかな、ゼーんぶ、取ってきたんだ、料理するんだ。」

私 「あー、そうなの。これからじゃあ、食べるんだね。おいしそうだもんね。
……後で、貼りなおそうか。」

T男 「だめだよ、もう。焼いちゃったんだ。」

私 「そうだよねー。」

その後、なべに水を入れて、魚を入れ、グチュグチュ。

魚が足りないというT男の言葉を聞いて、私も魚作りに一役買い、小さいビニールに新聞紙や京花紙をいれてモールでしばる魚を提示した。

T男とK男が一緒に作り始める。大きいのも小さいのも、カラフルなのを2つ3つと作る。私はさらに、ブルーのラシャ紙を敷き、まわりに積木をおいて、その中へ魚を入れ釣堀になるように一緒に進めていく。

他児も興味をもって参加し始める。その子たちが魚つりを始めたころ、T男は、積木を取り、ラシャ紙の端を持って上下させ、「波を作るとおもしろい。」積木はバラバラ。他児も「T男ちゃんやめてよー。」と口々に言う。T男、まったく意に介せず。今度は積木からバチャーン。「とびこんじゃった。」と泳ぐまねをしている。

T男の、遊びの世界や心に浮かぶイメージにはついていけないが、面白さは抜群である。海の魚をみて料理することや、水（ラシャ紙）をみると波とか泳ぐとか飛び込むとか。身のまわりにある様々な環境を自分の遊びの中に取り込んで欲しいと願っていたが、T男のような「えっー！」と思ってしまう発想には私の方が対応しきれない。今まではT男の楽しさと他児の楽しさの違いから、つい、多勢に一人ということでT男の方を制したりして、T男に満足感を持たせてやれなかったことが多くなってしまっていた。

T男のユニークさを逆にまわりの友達に広めていけるような働きかけができるようにしたい。それがT男を孤立させず友達とのつながりをつけていくことにもなるだろう。これは私の大きな課題なのだと自分に言いきかせる。

〔事例3から読みとれること〕

N教師は、学級にいる一人一人の幼児が本当にそれぞれ違うことを知って、幼児一人一人に応じ、寄り添っていこうと努力しています。そのためにまず、日々の保育における幼児との対応の中で心を揺り動かされたことを中心に保育日誌を付けています。この事例では、書くことを通して保育の中で何を大切にしていってよいか考えるうちに、そのことが、自分自身の再発見ともなっていることを読みとってほしいのです。

ここに抜粋した5月18日の記録では、全く思いがけない幼児一人一人の表現に驚き、一人一人のその子らしさをみつめることの大切さ、大変さに気づいた記録です。6月18日では、一人の幼児の思わぬ姿を発見し、またその幼児と共感し、その喜びを味わうことによって心が向かいあい、そのことが援助の一つになっていることを述べています。また、9月9日にはユニークなT男の全く予期しなかった行動にぶつかったとき、それを受容し、その行動につきあったことにより、他の幼児との関係の中で思わぬ活動が展開され、結果的に友達とのつながりができていったことを述べています。

保育日誌は、ありのままの自分を振り返り、書くことで自分をみつめなおすきっかけとなります。この保育日誌も単に幼児たちの行動の羅列の記録ではなく、一人一人の幼児について、あるいは一つ一つのエピソードについて、その時の幼児の心の動きと教師とのかかわり方が詳しく、しかも深く考え、省みたことを率直に述べているところに意味があるのです。一人一人に応じていくためには、日々の小さな記録の積み重ねが貴重な資料となり、幼児をみる目、保育をみる目が育っていくのです。



事例4 みんなで考える

担任となれば、常に学級の幼児たちと共に考えながら生活を創っていきたいと考えます。いつの間にか、自分は毎日そのような気持ちで幼児と生活していると思い込んでいるわけですが、実際にはどうでしょうか。

この事例では、5歳児の学級で、個人用植木鉢に何を植えるかについて教師が中心となってみんなで話し合った過程を述べています。しかし単にみんなで話し合うことが、みんなで考えることなののでしょうか。この事例の問題点は何かを探り、「みんなで考える」とは具体的にどうすればよいかについて考えてみましょう。

〔「さいしょからきまっていたんじゃないの」 5歳児 5月〕

年長の5月、今年の個人で栽培するものは何がよいかと職員で検討の上、遊びに使える、変化が楽しめる、丈夫で育てやすいなどの理由で、あさがおの鉢植に決定した。鉢も種も注文したあとなのに、「こんどね、みんなでひとつずつ花を育てようと思うのだけど何がいいかなあ？」すると、「わたし、バラがいい！」「ぼく、ひまわり！」「チューリップいいな。」等々。

当然のことながら、子供たちは自分の知っている限りの花の名前を一気に挙げ、眼をキラキラさせる子供たちは張り切っている。そこで、私のしたことは、何故、その花ではいけないのかということを主張し、子供たちの意見を否定していくことだった。「バラは小さな植木鉢では育てにくいだよ。」とか「チューリップは季節じゃないのよねえ。」などと言いながら、何とか誰かが「あさがお」と言い出してくれないかと思い、子供たちとやりとりをしていた。

そんなとき、教師の思いを察してか、「先生、去年の年長さんはあさがおの花育てたね。」と言い出すA男に、「そうなのよ！」とにつこりし、「みんな、あさがおなんかどうかしら？」と提案する頃には、「いいよ、あさがおで」というなんともおかしい雰囲気になってしまった。その後すぐに、教師の後ろから出てきた植木鉢とあさがおの種を見つめて、Y子は「なあんだ、最初から決まっていたんじゃないの！」と言った。はっとした私は、「実はそうなの……。」と言うしかなかった。

ふと、この話し合いは必要だったのだろうかと思った。

〔事例4 から読みとれること〕

この事例では、幼児から「はじめから決まっていたのではないかと指摘を受けることにより教師ははっと気づかされ、反省しています。「これは子供の考えです」という教師の言葉をよく聞かすが、実際には、この事例のように、教師がはじめから決めた回答をもって、ただ話し合いの形式を取っただけの場合も多いのではないのでしょうか。

小学校以上でいう教材のように、ある活動のために特定の素材を選び、それにどうにか取り組ませたいという考えを教師自身もっているからでしょうか。あるいは、幼児の意見を取り上げているとうまく先に進まないとか、その時の対応が見つからないのではないかなという不安があって、あらかじめ材料や活動を考えておくのでしょうか。しかし、押しつけてはいけなから話し合いで決めようということにしてしまうかもしれません。



「みんなで考える」ということは、一つの問題を知恵をだし合い、生かし合いながらよい結論をだしていくということではないでしょうか。そのためには、まず、みんなの必要感に訴えなければならないでしょう。幼児に、決まったことをなげかけることは、少しも幼児の立場にたったもの

とは言えません。

幼児自身が誰かと一緒に考えてほしいと思う時はどんな時でしょうか。

一人では何をしたらよいかわからない時、あるいは、もっとおもしろいことをやってみたい時など、支えてくれたりする人がほしいのではないのでしょうか。自分の思いがなかなか実現しない時にも一緒に考えてくれる人がほしいのでしょうか。

また、一緒に考えてもらって問題が解決したとか、状況が変わったとか、前進したとか、そのことがうれしかったというような体験が蓄積されることによって、いろいろな課題をいろいろな人と考えようという気持ちが育っていきます。教師と一緒に考

第3章 一人一人に応じる指導の実例（実践事例）

えながら、いろいろな課題を解決していくということは、学級という集団の場で育つのです。

学級という場は、物理的に一緒に生活するのではなくて、お互いに温かい関心を寄せながら生きる場です。また、相手が困ったときには自分のことのように心配し合いお互い助け合っていくことの大切さと喜びを知ってお互いの関係を変えながら育ち合う場です。

教師が幼児一人一人に温かい関心を寄せて、幼児の心の動きにそい、一緒に考え合いながら生活する姿を見せるとき、はじめて幼児は人とのかかわり方を学んでいきます。そして共に考えることは共に生きることであると知っていくのです。



事例5 保護者の話に耳を傾ける

この事例は、母親同士のいさかいを相談された教師と母親との話し合いの過程を示したものです。教師のどんな応答が、母親の気持ちの変化となって表れているか、事例から読みとってみましょう。

〔T子の母親からの相談〕

①T子の母親の訴え

T子の母親からA子の母親とトラブルをおこしたことについて相談を受けた。T子の母親は、A子が、近所の公園でもわがもの顔でいばり散らすので、たまりかねてA子に注意をし、さらに、その晩A子の母親に電話をかけ、一緒に公園に出て来てほしいと言ったことが、逆に「うちの子だけが悪かったわけではないでしょう。私が公園に出るか出ないかは、私が決めることです！」と切り口上で言われてしまった。腹が立ったT子の母親は、つい「自分の子の面倒をみるのは当たり前でしょう！」と言い返すなど、売り言葉に買い言葉になってしまったという相談である。「あれから1週間もたつのにAさんったら、私が挨拶しても知らんぷりなんですよ。お互い近所なんだから、大人気ないと思いませんか？先生はどう思います？」とT子の母親は私に意見を求めてきた。

私は一瞬、自分ならどうするかという私なりの答えを頭の中に思い浮かべてみた。しかし、自分の考えを表すということは、どちらかの母親に善し悪しの判定をするような気がして、そこで、自分の答えを出す前に、もっとT子の母親の気持ちをわかるよう心がけようと思い直した。

まず、T子の母親に自分なりにわかったことを話してそれを確認してみようとした。

②T子の母親の話聞くことによって

教師「もし、おかあさんのおっしゃりたいことと私の受け取り方が違っていたら言ってください。A子ちゃんの態度が目にも余るのでおかあさんが親のかわりに注意したのに、その気持ちがわかってもらえないばかりか逆にAさんに文句を言われたような感じで、とてもくやしい思いをなさっているのですね。」

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

母親「そうなんです。だって、まだ4歳の子供なのに子供だけで外で遊ばせて、親はまったく知らんぷりで家にいるなんて考えられないじゃないですか！」

教師「Tさんは、まだ4歳の小さな子供なんだから親がついているべきだと思うのに、Aさんはそうは思わなかったんですね。」

母親「だって誘拐だってあるし、それに、子供同士のトラブルだって多いし……。子供だけでは何もできないんですよ。今度も、親がついていれば親がAちゃんを注意したと思うんですよね。親がいないから私が注意したのに、Aさんはそのことがわからないからくやしんですよ。」

教師「なるほど。親がすべきことをしないでいて、『余計なことをして…』のようなことを言われたのが心外なんですね。」

母親「当たり前ですよ。親と一緒にいるべきですよ。それに親同士のお付き合いだってあるじゃないですか。」

教師「親同士のお付き合い？」

母親「そう、大事だと思うわ。子育てのこととか、お料理の作り方とか情報交換の場にもなるし。これがむずかしいのよ。」

そこまで言う前から急にTさんは、今までの激怒した口調とは変わって、はっとしたように、

母親「そう、これが結構むずかしくて……。そういえば、Aさんはもともとみんなと一緒にいるのが嫌いな人だったわ……。」

教師「みんなと一緒にいるのが嫌い？」

母親「そうなんです。そういえば前に、みんながそろっているところには怖くていられない、と言っていたことがあるわ。」

教師「みんながそろっているところだと……。」

母親「そうです。だから、友達も少ないし……。 (沈黙)」

教師「……………」

母親「彼女……、もしかしたら、私たちの公園の仲間に入りにくかったのかしら？」

③T子の母親の気づき

母親「もしかしたら、Aさんのとっても嫌なことを強要していたのかもしれないね。そう。もし、私がAさんの立場だったら、公園に出るか出ないかは余計

なお世話だと思うもの……。(沈黙) 先生、私、今の気持ちをそのままAさんに話してみようかしら…。」

教師「きっとその方がよいと思います。」

話を聴き始めた時の私は、教師である自分がなんらかの答えを出さなければならぬと思っていた。しかし、驚いたことにTさんは自分で気づき、自分で解決していった。私がしたことは、一生懸命に聴きTさんの気持ちをわかろうとし、わかったことを確認しただけだったのに。

〔事例5から読みとれること〕

◇よい聴き手となる

保護者から相談されると、教師はすぐにその解決法を示したくなってしまいます。そして、自分なりの考え方を示し、「もっと仲良くしなければいけない」とか「もっと謙虚に」など、『すべきこと』や『あるべき姿』に向かって努力することを言いきかせたりしてしまいがちです。こうした助言は、その時だけはなんとかできるような気がして問題は解決したかのように思ってしまうますが、多くの場合すぐに挫折してしまいがちになります。それは、その人が自分自身で気づき解決してきたことではないからです。悩みを持つ保護者にはまず、話を聞いてくれる相手が必要です。そして、教師が保護者の話を聞き、その気持ちを一つ一つ確認していくことで保護者自身が自分の気持ちに気づき、心にゆとりができます。

この事例では、担任が親の話をじっくりと聴きたいという姿勢を示しています。聴こうとする教師の姿勢は相手に心を開くことにつながります。教師が聴いてくれるので保護者も話したくなるのです。また、人に話すことは、相手に伝わるだけではなく、自分の中にあるもう一人の自分に気づくことになります。つまり、話すことによって自分がわかり、自分の気持ちを知った時に相手の気持ちも見えてくるのです。解決するのは教師ではなく、当事者の保護者自身であることに留意する必要があります。

◇相手の気持ちをとらえ、フィードバックする

人は自分のことをわかってもらえたという安心感があると、落ち着いて自分を素直にみつめることができます。したがって、悩みを持つ保護者の気持ちをしっかりとらえて、フィードバックすることにより、保護者自身が自分の気持ちを整理することが

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

できます。興奮した気持ちからだんだん落ち着いた気持ちになってくることで、構えずに自分の内面を素直にみつめようとすることができます。相手の立場にたって話を聴いてくれる人がいて、その人が「あなたの言いたい気持ちはこういうことですか？」と確認してくれることで、その言葉を落ち着いた気持ちで聞きながら、自分の内面に気づいていくことができるのです。

事例の中で、T子の母親が言ったことを繰り返すように確認しているのは、この意味で大切なことです。つまり、会話をリードするのは保護者自身であって教師ではないこと、教師はあくまでも、本人が問題に気づき解決しやすいよう、一緒に考え合っ



事例6 保護者と共に考える

学級懇談会の必要性は分かっている、自分よりも経験豊富な親たちと話し合うのは、不安がつきまとうこともあるでしょう。

特に新学期、学級編成替えがあった後などは気心が知れないため、なおさら不安になります。幼児ならまだしも、多様な価値観をもつ親との間に信頼関係を築くことはたやすいことではありません。頑張れば頑張るほど親との気持ちがずれるのを感じることもあります。

次の事例は以上のようなことに悩む教師が、園内の先生方に悩みを共有してもらい、アドバイスを受け、努力しながら親との関係を変えていく過程が述べられています。自分の実践と照らし合わせながら、親とのかかわり方や学級懇談会の在り方などについて、考えていきましょう。

〔言葉づかいをめぐる〕

①年長組になって初めての懇談会

年長組になり、初めての懇談会が始まろうとしている。半数の保護者はよく知っているが、もう半数の保護者とはあいさつを交わす程度のつながりである。ベテランの先生から引き継いだ学級であり、私に信頼を寄せてくれるかどうか、とても不安な気持ちである。《懇談会は、教師先導ではなく、保護者と共に考え、信頼関係を築く場である》という園内打ち合わせでの共通理解を支えにがんばろうと思った。

懇談会場の雰囲気は、なんとなくぎこちない。その雰囲気にどう切り出してよいかわからなくなってしまった。とりあえず、年長になってからの子供たちの張り切っている生活の様子を話し始めた。

「今日の保育をご覧になり、感想などありましたら、お聞かせ下さい。」と切り出した。

保護者「 （沈黙） 」

担任「それでは、お隣の〇〇さんから、お願いできないでしょうか。」

A 「年長になって、広い部屋でうれしいといっています。」

最初に口火を切ってくれてほっとする。

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

・・・順次話してもらいうちに、ある保護者から

H 「この頃、言葉が悪くなってきたのですが、先生は、どのようなお考えで指導くださっているのでしょうか。お聞かせください。」

丁寧な言葉ではあるが、ちょっととげがある言い方が気になる。

担任「その時々で注意しているのですが、なかなか守れないようです。でも、親しみの表れだと思いますが…。」

気持ちを押さえたつもりだったが、こちらもつい切り口上で返してしまった。

H 「そうですか。」

ちょっと不満そうな表情を感じながら、先に進んだ。

すると、また、

H 「さっきの言葉づかいのことですが、やはり、親しさの中でも、『～君』や『～さん』と呼び合うよう指導していただきたいと思います。」

かなり、きつい言い方で発言され、「え、また」とびっくりする。ここで動揺してはいけなと自分に言い聞かせ、《保護者同士で考え合う会》にしようと思った。

担任「ぜひ、みなさんのお考えを聞かせてください。」

K 「うちの子は、この前、友達に『ブタ』って言われて、もう幼稚園に行きたくないって言っていました。」

N 「傷つく言葉は、絶対に許さないでいただきたいわ。」

E 「うちは、男の子のせいか、呼び捨てでも平気だと思います。親しくていいんじゃないですか。」

だんだん、陰悪なムードになってきて、どうしたらよいかわからなくなってきた。

時間になったので、今後も指導していくという話で、懇談会を終了した。

②懇談会を振り返って

なぜ、かたくなになってしまったのだろうか。

《信頼されていないのでは》《好かれていないのでは》《批判的にみられているのでは》など、不安とあせりが先にたっていたようだ。そのため、保護者のちょっとした言い方に、とげがあると感じたり、とまどったりして、つい防衛的になり、保護者が教師に伝えたい気持ちを受けとめられなかったのではないかと反省した。

また、学級全員というのは抵抗が大きい。次の懇談会は、7～8人でのグループで4日間に分けて行うことにした。

③グループ懇談会を開く

今度は、言葉づかいについて率直な意見を出してもらい、保護者と一緒に考えようと思った。とにかく、頭の中で《話を聞こう》《ありのままの気持ちを受けとめよう》と繰り返し、呪文のようにとなえながら、懇談会に臨んだ。

担任「この前の懇談会で、言葉づかいについてご意見をいただきましたが、大切なことなので、今日はこのことについて、考え合ってみたいと思います。そこで、みなさんのご家庭の様子や御意見など、どんなことでもお聞かせ下さい。」

と、話した。自分でも不思議なほど緊張感はなかった。

O 「うちでも注意しているのですが……。」

S 「うちでも、私に向かって『わかってるよ、ば〜か』など、今までにない言葉なんです。」

担任「そう言われると、ショックですね。」

S 「そうなんです。」

M 「でも、今までお子さんおとなしかったでしょう。最近元気になってきたんじゃないの。」

次々に保護者から意見が出てきた。私も前回とは違い、保護者の気持ちを一生懸命聴きとるよう努力した。

A 「この前、友達に言われた言葉で傷ついたらしいのですが、言い返してやりなさいって言ったんです。」

W 「うちも言い返してやりなさいって言ったんです。」

担任「お母さんも思わず、カッとなったんですね。」

W 「そうなんです。親がカッとなりましてね。」

(笑い)

担任「たいへん、私は、この学級を思いやりのある学級にしたいのに。」

A 「そうですね。」

いつの間にか、保護者同士で問題解決に向けて話し合っているのに驚いた。一人

第3章 一人一人に応じる指導の実際（実践事例）

一人の保護者の気持ちを受けとめることが、こんなに懇談会の雰囲気を変えるものなのかと実感した。私は、今まで保護者と話すことがとても苦手であったが、この懇談会を機会に気軽に保護者と話そうとさえ思えるようになった。先輩の先生の助言のように、一人一人の保護者の気持ちにそうこと、温かく受けとめること、真剣に話を聴くことなど、保育の基本と相通じるものであることもわかった。

しかし、まだまだ、保護者の質問にすぐに『こうしたらどうでしょう』と一方的に答えたい自分気づくことがある。少しずつ努力していきたいと思った。

〔事例6から読みとれること〕

◇いろいろな考えを温かく受けとめる

保護者は、教育に対して様々な価値観をもっています。しかもその価値観、特に教育に対する考えや子育てについての信念は一朝一夕に得たものではなく、それぞれの人生経験の中で模索して得てきたものです。

教師の考えだけをわかってほしいと願うのではなく、お互いに心を開き考えを出し合い受けとめ合っていくことが大切です。言葉の乱暴な言い方が気になる保護者なら、まず、しっかりとその思いを受けとめることが必要でしょう。「気にしないでください。成長期にはありがちです。」と言っても、その人にとっては気がかりなことなのです。

教師が、その保護者の思いを受けとめることで他の保護者にも安心感を与え、《私も話して大丈夫》という思いが生まれてきます。懇談会では教師が話を熱心に聴く姿勢でいることが、周囲の保護者を同じ土俵で学級全体の子供について考えようとする会になります。その中で、保護者との信頼関係が育まれていくのではないのでしょうか。

◇みんなで考える

個人的な悩みや、教師に対する質問や要求も、即答しようとあせらずに共通の話題となるよう、みんなに投げかけてみたり、他の保護者の体験を聞いたりするようにしたいものです。そうすることにより、みんなで考える雰囲気ができてきます。

みんなで考えることにより、保護者自身に様々な変化がおこります。

一つには、保護者一人一人が自分が自分の思うように話すことができることで、保

護者は、そのように先生は配慮してくれたという気持ちをもつことができます。

二つには、保護者は自分の考えや行動を語ることで自分が何をしようとしているかがわかり反省してきます。

三つには、保護者は自分が話すことで気持ちが安定したり、他の人がどう思うかを聴きたくなります。

何でも話せる雰囲気は、信頼関係を築く大切な一歩です。保護者自身が自分を語ったり、心を開いて他の人の話を聞くゆとりができることで、問題を自分の課題として受けとめられます。また、話をする中で自分を素直に反省したり、冷静に見たりできるようになります。

教師が保護者と気を楽しんで話をしたいと思う気持ちは、必ず、保護者に伝わります。この事例では今後も話し合いたいという思いを持って懇談会を終了したことが、教師と保護者の気持ちのつながりを深めたと考えます。

幼児一人一人の心の動きに応じるように、保護者とのかかわりにおいても一人一人に応じる姿勢を教師は身につけたいものです。教師は、一人一人の保護者が、教師と話し合ってよかった、安心したという気持ちがもてるような保護者とのかかわりを身につけていきたいものです。



※参考資料

具体的な状況に応じる〔演習問題〕

幼児一人一人の心の動きにそったかわりを生み出すために必要な教師の基本姿勢は、どれも自分の保育の具体的な状況の中での幼児の姿をもとに考えていかななくてはなりません。

そこで、ここでは身近な事例を取り上げ、日常の保育の中で生じるいくつかの状況を、演習問題の形で提示してあります。この演習問題は、事例に見られる幼児・教師・保護者などの姿から、なぜそのような状況が起こってきているのか、それぞれの内面に焦点を当てて考えていくための、また、それぞれの保育と照らし合わせながら自分のかかわりを見直し、一人一人に応じる教師の基本姿勢を身につけていくための手がかりとして活用してください。

活用の仕方としては、グループ演習の資料として事例をもとに討議したり、事例の中の様々な立場にたって考えてみたりするのもよいでしょう。また、幼児の一人一人の心の世界に近づき、その動きにそった援助をしていくもとなる日常の記録の在り方を工夫する資料としても活用できるでしょう。

演習問題 1

事例〈H子と心のつながりを持ちたい・・・〉

入園当初からH子は母親とはなれたがらず、毎朝泣いて母親にしがみついている。5月の今も母親がいないと一日中でも泣いている。そばに母親がいる時は、その回りで少し遊ぶが、友達が寄ってきて同じことをしようとすると、「だめー。」と強い口調で接したり、自分の欲しいものが手に入らないと泣きわめいたりする。

入園当初、職員会議で相談し、他の先生方から「少し様子を見てみたら？」とか「母親にいてもらったら？」というアドバイスを受けて、私としては、無理をせず受け入れていきたいと考え、母親に「いっしょに保育室に入って付き添って下さい。」と頼むとほっとした様子だった。それからずっと付き添っているのですが、まだH子の心のよりどころは母親で、私のところへはやって来ない。それどころか、H子が遊び始めたことを一緒にすれば気持ちが通じるかと思い、隣へ座ってみても、やり始めた粘土をやめて母親の方へにじり寄っていったり、興味を持っているように見えたので、人形を持っていくと、かたくなに受け取ろうとしなかったり…など私を避けようとしているとしか思えない。しかし、もうそろそろ自立させなくてはいけないと思い、母親にも伝えた。このごろは母親も回りの目が気になり始め、少しイライラし始めている。私からいわれたせいか、きりのいいところで出ていこうとすると、H子はパニックになり余計母親にくっついてしまう。

こんなH子が私と心のつながりをもって、何とか自立していったほしいと思うのだが…。

1. 事例のH子、母親、担任の先生、それぞれの立場になってその気持ちについて話し合ってみましょう。
2. 入園当初のH子のような場合、心のつながりをつけるには具体的に、どのようなことをしたらよいと思いますか？
3. 同じような子供の事例を出し合い、自分の場合はどういう方法をとったか、その結果どうだったかについて話し合ってみましょう。

演習問題 2

事例〈途中入園してきたA男に戸惑う・・・〉

入園して2ヵ月がたち、ようやく子供たちも落ち着きを見せ始めた6月、A男が転入してきた。A男は転入したその日から園内のどこにでも行ってしまい、何でも手にしては放り投げる、ガス栓までもひねってしまう。そして少し慣れてきたこの頃は、小柄な子を狙ってドーンと押したり叩いたりつねったり…。

それまで子供たちは私の言うことをよくきいて落ち着いた学級だったのに、A男によって、この頃、学級が乱されザワザワしている。どうしてこんな子が入ってきたのだろう…、こんな思いも時々心をよぎってしまう。

母親の様子を見ると、スキンシップが足りないのだろうと思われたので、出来るだけ抱き締めてやるのだが、すぐに逃げ出して行ってしまう。またA男は水が好きなのでタライに水を張ってやると、中に入らずぶぬれになって喜んでいるがその後はやっぱり同じである。すこしでも好きなことをすれば落ち着くかと思うが、ちっとも変わらない。優しく接してやらなくてはとおもいながらも、でも、度々ものを持ち出したり投げたりした時は、やはり悪いことは悪いと教えなくてはいけないと考えてしまい、いつのまにか強く叱ってしまう。

今日も女の子を強く突き飛ばしてしまったので、危ないと思い飛んでいって女の子をかばってやった。すると、学級の男の子たちが5～6人がA男を取り囲んでぶったり責めたりし始めた。その様子を見てA男がかわいそうとも思ったが、でも自分がやればこうしてやられるのだということを知っていくには、これも大事ななことかと思って見ていたのだが…。

一人一人の子供の気持ちを受けとめて接していかななくてはいけないと思っても、A男の場合はとてもそうはいかない。どうしたらよいのだろう。

1. A男は、なぜこのような行動をとるのでしょうか？

A男と担任の先生のかかわりの中での心の動きについて、それぞれの立場になって考えてみましょう。

2. この事例に似たような体験はありませんか？

参考資料

自分の体験したことについて出し合い、話し合ってみましょう。

3. A男がこれから先学級の一員として安定して過ごせるようになるにはどうしたらよいのでしょうか。

演習問題3

事例〈幼児の気持ちとのずれにはっとして・・・〉

4歳児、運動会の最後の練習の日のことである。

今日はみんなで作った赤、青、黄色の電車に乗ってリズム遊びをすることになった。このところ毎日順番で運転手になって楽しんでいるので、今日も運転手を決めて練習をすることにした。電車の表現の曲がかかって、いざ動きだしたとたん、S男がワァーと泣きだし、運動場の端の方へ駆け出して行ってしまった。S男はいつもなにかしようとするところこういう行動になることが多いので、「ああ、またかぁ。」と嫌な気持ちになった。なんとか誘い入れようとして「運転手かわってもらってあげるから」といっても、泣いて「いやー。」を連発している。しかたがないのでその場はそのままにしたものの、リズムが終わっても未だ泣いているS男を見て「もう、わがままなんだから…。」と思いつつそばへ行ってみる。そして今日はじっくり話を聞いてみようと思った。すると…、「僕、黒い電車がいいよー。」という。これまでこういう時は放っておいたせいか、泣くばかりで自分の考えを言ったことはなかったのでうれしくなっておもわず「じゃ、あした一緒に作ろうね。」と言うと、すごくうれしそう。翌日、M男と一緒に熱中して黒い電車を作りあげた。自分の力で最後までやりとげたのは初めてのこと。

もしかするとこれまでわがままと思って放っていたのでS男が自分の考えを言う機会を失わせていたのではないだろうか。

1. 一人一人の幼児の気持ちがわからなくなるのはどういう時ですか？

事例を手がかりに考えてみましょう。

2. 似たような体験はありませんか？

幼児との気持ちのずれということについて、話し合ってみましょう。

練習問題 4

事例〈何気なくしていることが疑問に思えてきた・・・〉

担任している 5 歳児の学級で今日こんなことがあった。昨日動物園に行ったので、その時の印象画を描かせた。描き終わった幼児から、いつものように順番に並ばせて描いた絵についての感想を聞いていった。後ろのほうに並んでいた E、F、G 男の 3 人がそれぞれに描いた自分の絵を丸めてなぐりっこを始めた。私はせっかく描いた絵が破れてしまいそうなので「だめでしょう。ちゃんと並んでなくちゃ」と、つい叱ってしまった。3 人はしゅんとなって順番を待っていたのだが、自分の番が来て「何を描いたの？お話して頂戴」と私が言っても、黙ってしまって話そうとしなくなってしまった。3 人ともすっかりしらけきってしまったようで、それでも無理に言うと「ライオン」「ゾウ」「僕もゾウ」等と言って、絵を放り投げて行ってしまった。

なぜ大事な絵を放り投げてしまったのだろうか？なぜ自分の絵に託した気持ちを私に話してくれなかったのだろうか？今までこんなことってなかったのに…。

どうも子供たちの考えていることとは違うような気がしてきた。今まで何の疑問もなくやって来たことが、何だか変に思えてきたのだが…。

1. E、F、G 男にとって、動物の絵を描くことやその絵の話をするとは、どんな意味を持っていると考えられますか？

2. いつも何気なくやっていることを、幼児の立場になって、あらためて考えてみた時、疑問に思えることはありませんか？

そんな実践を出し合って話し合ってみましょう。

練習問題 5

事例〈A 太の母親とうまく話し合えない・・・〉

年少組 9 月の保育参観日。A 太の母親から「うちの子はいつも一人なのですか？」
「友達と仲良く遊んでほしいから幼稚園に入れたのに、家で遊んでいるのとかかわらないじゃないですか。」と、強い口調で言われてしまった。A 太はこのところ虫とりに夢中で今日も時々「先生、ほら、見てー。」と寄ってくるものの、ほんの 2～3 秒でまた虫とりへ走っていってしまうので、みんなと遊んでいた鬼ごっこには特に誘い入れはしなかった。そこで、「大丈夫。A ちゃんは一人でもちゃんと遊べる子だから。」と説明したのだが、不満そうにして帰ってしまった。

数日後、A 太の母親が「A 太は先生が誘ってくれさえしたらみんなと一緒に遊べるのに無視されている。うちの子かわいそうだわ。」と言いつらしていると耳にした。そこで、次の日、母親に A 太を無視したのではなく、A 太の興味を大切にできなかったからだという私の思いを一生懸命説明したのに、言えば言うほど A 太の母親の視線は冷たくなり「もういいです。」と言って帰ってしまった。そしてまた陰で「隣のクラスの先生がよかったわ。担任の先生と A 太は相性が悪いのよ。」などと言いつらしているらしい。

こんなふうに気持ちのすれちがってしまった場合には、どうしたらよいのだろう。

1. この事例でなぜ母親と担任がすれちがってしまうのか考えてみましょう。
2. 自分が保護者と応答している場面を振り返って、自分自身の話し方や保護者に対応する時の構え等について話し合ってみましょう。
3. 保護者を信頼できる時、保護者から信頼されていると感じる時はどういう時ですか？

いろいろな場面を出し合って考えてみましょう。

幼稚園教育指導資料第4集「一人一人に応じる指導」

指導資料作成協力者（50音順、敬称略）

（職名は平成7年3月3日現在）

有賀	和子	江戸川区立篠崎幼稚園長
飯長	喜一郎	お茶の水女子大学教授
小池	ユキ江	前橋市立神明幼稚園長
後藤	節美	別府市立石垣幼稚園副園長
小山	孝子	おだ学園幼稚園副園長（東京都）
柴田	炤夫	健伸幼稚園理事長（千葉県）
高杉	自子	昭和女子大学短期大学部教授
田中	雅道	光明幼稚園長（京都府）
砥	敬三	東京都教育委員会指導主事
豊田	一秀	元 お茶の水女子大学附属幼稚園教諭
中山	博子	大田区立西六郷幼稚園教頭
深澤	瑞穂	江東区立平久幼稚園教諭
吉村	真理子	元 松山東雲短期大学教授
渡邊	祐子	台東区立石浜幼稚園教諭

なお、文部省においては、次の者が本書の編集に当たった。

塩谷	幾雄	文部省初等中等教育局幼稚園課長
野村	睦子	文部省初等中等教育局視学官
折原	守	文部省初等中等教育局幼稚園課幼児教育企画官
小田	豊	文部省初等中等教育局幼稚園課教科調査官
神長	美津子	文部省初等中等教育局幼稚園課専門職員
渡辺	恵子	文部省初等中等教育局幼稚園課指導係
斉藤	光男	文部省初等中等教育局幼稚園課指導係
谷元	幸恵	文部省初等中等教育局幼稚園課指導係
平川	幸子	文部省学術国際局学術課地球環境学術企画官 （前 文部省初等中等教育局幼稚園課幼児教育企画官）
大木	茂	衆議院法制局第2部第1課参事 （前 文部省初等中等教育局幼稚園課指導係長）
坂口	浩司	文部省初等中等教育局小学校課指導係 （前 文部省初等中等教育局幼稚園課指導係）